Boxoft Image To PDF Demo. Purchase from www.Boxoft.com to remove the watermark

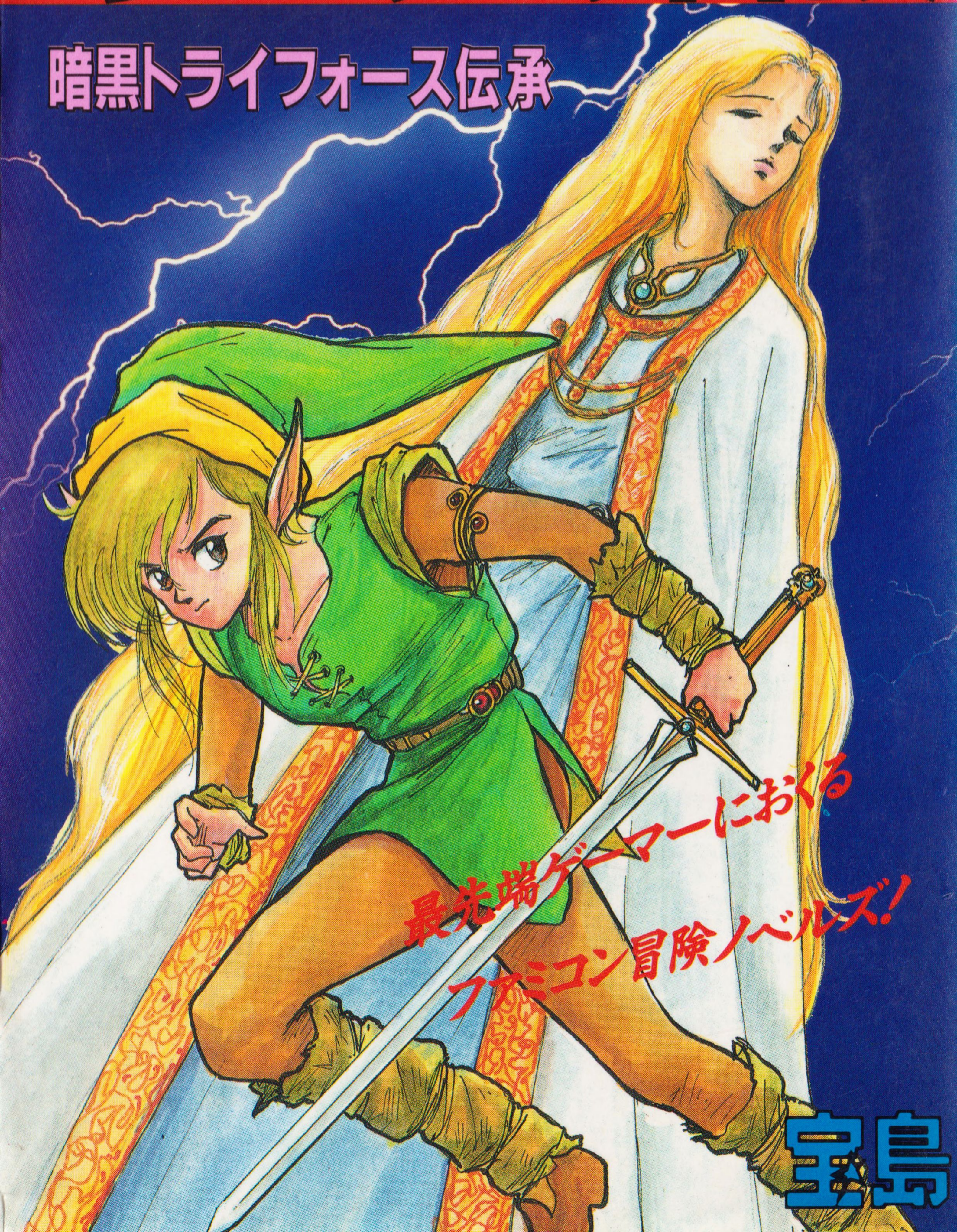
ファミコン必勝本

FRIDAY SPECIAL

ゲームブック2

リンクの冒険

暗黒トライフォース伝承



Scanned by Melora for History of Hyrule

historyofhyrule.com
melorasworld@gmail.com

Hey everyone! I'd personally be really happy to see you make scanlations or take portions of this and make fun things and posts with it. The only things I ask are:

1. Try to link back to **historyofhyrule.com**, somewhere, somehow, for credit. This is so people can find more info and other works, reach me if they have questions, or want to contribute other content. It's actually how I've found out about so many of these things and been able to get them to you in turn.

2: Please don't just re-upload the whole set somewhere else. This is in case it's re-released officially so I, and my site, don't come into conflict with any publishers or artists for making scans. (Or, if you do use the whole set, because you've made scanlations, just don't use them commercially and take the full set of my scanned images down if you ever hear about a re-release.) In the 20 years I've been doing this I have never once left scans up if something comes back into print again. I only do the scanning work I do because, as an enthusiast, I don't want something that is actually out of print and rare to be lost forever.

Thank you for understanding!
-Melora

ファミコンゲームブックシリーズ　2

リンクの冒険

暗黒トライフォース伝承

THE LEGEND OF BLACK TRIFORCE

井上尚美／RECCA社
VENTURE PROJECT

JICC出版局

For

The Adventurous Kids

FAMICOM GAME BOOK SERIES 2

The Legend of Zelda II

★

THE LEGEND OF BLACK TRIFORCE

リンクの冒険

暗黒トライフォース伝承

プロローグ

死の山(デス・マウンテン)に霧がたちこめた。霧は岩の裂けめからはいだして、岩山全体を妖気でつつむ。なににおびえたのか、谷間の古い墓地に巣喰っていたカラスどもがいっせいに飛び立って、2度と戻ってはこなかった。

死の山(デス・マウンテン)のふところ深く、奇怪な2つ並びの岩がある。おりしもその地下にうち捨てられた忌むべき神殿で、邪悪な儀式が進行していた。

地面に刻まれた魔法陣。そのなかでちろちろと踊る炎。黒覆面の司祭がひとり、周囲をめぐりながら秘呪をおこなう。

「汝(なんじ)、暗闇にうごめく邪の力の主よ、時は来たれり、汚穢(おわい)の炎のなかよりよみがえりて汝(なんじ)を滅(ほろ)ぼしたるものに復讐(ふくしゅう)を……」

手にした小箱のなかからなにかひとつかみ、またひとつかみと炎のなかになげいれる。炎はそれをのみこむごとにいきおいを得た。

「みずからの灰のなかより立ちあがらん……」

司祭は目を細めて見守った。そして赤褐色(せきかっしょく)の染みのある布きれをとりだすと、おもむろにひろげ、炎の上にかざして言う、

「汝(なんじ)欲したるは彼(か)のものの血なりや、なればわれここにそれを与えん」

炎の舌先がものほしげにゆらめきたった。司祭の覆面の下にうす笑いがひろがる。
「おまえを倒したやつの血をなめてよみがえるがいい…」
血染めの布がなげこまれた。
「ここに暗黒の力をもたらさん！」
ぼぼうっ、と炎がおそろしいいきおいで立ちあがった。

——このハイラルにまたもやおそろしい影がうごめいております。

異変はまずあの死の山(デス・マウンテン)と呼ばれる一帯から起きたと申します。あるとき突如(とつじょ)としてたちこめた深い霧は幾日たっても晴れる気配がなく、近くの町に住む人々を底知れぬ不安におとしいれたのでございます。人々の申すには、古い墓地で夜な夜な死人がよみがえり、生けるものに喰らいつくとか…。

おそれおののいた人々は町を逃げだし、うわさはまたたくまに国中にひろがりました。このことで、数年前国中を恐怖と混乱におとしいれたあの魔物一族のことを思い起こさなかったものがいるでしょうか。魔物がよみがえった…だれもがふたたび恐怖のとりことなりました。

さらに人々を、とくに宮廷のかたがたを混乱におとしいれたのは、ゼルダ姫の身にふりかかったできごとでございます。姫はある夜をさかいにお目覚めにならぬのでございます。どこがお悪いものか、医師すらいっこうに手のほどこしようもなく、こんこんとお眠りになるばかり。魔物の呪い…おびえた人々のささやきがそこかしこでかわされております。

このままでは国は乱れるばかり、はたしてまことに魔物のしわざであろうか…おいたわしいゼルダ姫に心を痛める父王様は、3人の重臣(じゅうしん)をおそばに召(め)され、良き方策をおたずねになりました。賢者ハルデナーハ、予言者ジハド、勇剣士ダヌーク、このかたがたが王の信頼厚き側近(そっきん)なのでございます。

プロローグ

御前会議は夜どおし続きました。その結果、あの若者の名があげられたのも当然のことでございましょう。かつて魔族の討伐に功のあった、リンクと申す若者でございます。

賢者ハルデナーハどのの反対をおしきり、その若者をひとりで死の山にさしむけるよう国王に強く勧められたのは、予言者ジハドどのであったということ。その理由などこの乳母めには想像もつきませぬ。ただ、これだけはわかっております。あの責任感の強い若者は、命ぜられずとともすすんで出かけることでありましょう。みずからの手で滅ぼしたはずの魔物がよみがえり、またしてもゼルダ姫に魔の手をのばしたとあっては…。

それにしても不吉な予感がいたします。古の言い伝えによりますと、魔物はそれを滅ぼしたものの血によりよみがえるとか。よもやそのようなことがあろうとは…。

思えばあのときのリンクどのの血…。

あれはこのようなことになるほんのわずか前でございました。お城の庭で園遊会がひらかれたのでございます。そのおりどなたが言いだされたものか、リンクどのと勇剣士ダヌークどのが御前試合をなさるはこびとなりました。

その試合でリンクどのは傷を負われ…いえいえ、王国随一の剣士ダヌークどのをお相手に、まことあざやかな戦いぶり、一同をうならせるものがございました。このような試合の場合、相手に傷を負わせる必要などありませぬ。ダヌークどのほどにてだれのおかたが、あやまって切っ先を突きすぎたのはまことに異なること。ご自身すら首をひねっておいでで

した。そのようなできごとにもかかわらず、リンクどのの剣は相手の胸もとにぴたりとあてられておりました。

このときゼルダ姫がまっさきにかけよられたのは、いかにもほほえましいことでございました。姫はご自分のハンカチをさしだされ、リンクどのの傷口をいたわられたのでございます。さいわい傷は浅く、事なきを得たものの、いまにして思えばこれほど不吉な血がございましょうか……。

その血染めのハンカチが、一座のざわめきにまぎれてとうとうゆくえ知れずになってしまったことを考えあわせば……。

『ハイラル伝承・インパの語り』

HYRAL MAP
ルトの町
タンタリさばく
モルゲの沼
ミドロの沼
サリアの町
デスマウンテン
王家の墓の谷

ゲームの進め方

進・行

きみは、この物語りの主人公であるリンクとともに冒険の旅へと出発します。その行手には、さまざまな罠（わな）や敵が待ち受けています。きみ自身の選択で、うまくそのピンチを脱出し、リンクが目的を達成できるように導いてやらなければならないのです。また旅の途中には、多くの貴重なヒントや助言、そして重要なアイテムの数々があります。正しくそれらを手に入れて行くことが大切です。そうすれば、必ずやきみは選択を誤ることなく、リンクとともに、この冒険の真のエンディングまでたどりつくことができるでしょう。勇気と知恵で、挑（いど）んでください。

目・的

このゲームの目的は、悪のたくらみのすべてをほろぼし、ハイラルに再び平和を取りもどすことにあります。さらに、呪いによって眠りに落ちてしまったゼルダ姫を、目覚めさせてやらなければなりません。敵のたくらみは悪意に満ち、そして巧妙（こうみょう）です。あせらず、ひとつづつステップを進めていってください。また、このゲームには複数のエンディング

が待ち受けています。もし、きみがたどりついたエンディングが〃Ｄａｒｋ Ｅｎｄ〃であったなら、それは必ずしも幸福な結末となってはいないでしょう。たとえ、それで目的が達成できたとしても、です。その場合はもう一度最初からプレイをやり直し、幸福な結末を求めてください。

番号

各文章の最初にある白ヌキの大きな数字が、きみの現在いるステップのナンバーです。さらに、各文章の最後に、きみが次に進むべきステップのナンバーが指示されています。きみ自身の選択によって、次のステップナンバーを決定して下さい。なお、現在のステップナンバーの下にある小さな数字は、きみがどのステップナンバーから、現在のステップナンバーへやって来たかを示しています。もし、途中できみが思いがけないＧＡＭＥ ＯＶＥＲを迎えたときなど、この数字をさかのぼっていけば、好きなところからやり直すことができます。

1

「世のものはみなおそれおののいておる。このわしとてじつを言えばそうなのだ。魔物がよみがえったと？　おまえが滅ぼしたはずではなかったか？　やつはなにが狙いじゃ？　なぜゼルダをあのような魔の眠りに閉じこめる…」

　国王の心痛は僕の胸を深くついた。ゼルダ姫…。姫が眠りについたといわれるあの夜更け、ぼくはひどい悪夢にうなされたのだ。身を灼かれるようだった。魔王ガノンの復活…そうなのか!?　そうにちがいない。だとしたらやつの狙いはまずこのぼくだ、ぼくへの復讐に煮えたぎっているはずだ。そのてはじめがゼルタ姫か…卑劣な！

　宮廷に召し出されたぼくは、国王に命ぜられるまでもなく、もうその使命を深く、深く心に刻んでいた。

「やつの根城、デス・マウンテンにおもむきましょう」

「行ってくれるか」

「のぞむところです」

　王はうなずき、わきにひかえていた3人の重臣たちをかえりみた。

「この若者にそなたたちの力と助言を」

　まず勇剣士ダヌークが歩みよる。

1■　予言者ジハドが魔力の杖をさしだして言う。「強い魔力は封印したうえで渡さねばならぬ。それでも予見の力が得られるだろう」

「傷はもうよいのか？　陛下のお許しさえあればおれもともに行きたいところなのだが…。そのかわりこの剣と楯とを与えよう。あまたの邪なるものを葬った勇剣士の象徴、まさしくおまえにこそふさわしい。ふりかかる魔の手を力でなぎはらえ。…好運を祈る」
ダヌークはぼくの肩をがっちりとつかみ、ひとつおおきくゆさぶった。ぼくは無言でうなずき、それにこたえた。
つぎに賢者ハルデナーハ。
「…よいか、リンク、けっしてはやるでないぞ。町まちでうわさをあつめるのじゃ。わしにはどうもよからぬ策謀のにおいがかんじられてならぬのじゃ…人々に会え。思いがけぬことがわかるやも知れぬ。この地図をさずけよう」
ハルデナーハのくぼんだ目が、熱心にぼくを見つめた。
「こころして行きます」
最後に予言者ジハド。
「なみたいていのことではあるまいの…。そこでわしはこの魔力の杖を貸し与えてやるつもりだ。しかしおまえはこの杖に秘められた力をすべて使うわけにはいかぬ。わしほどに修行をつんでいないおまえがこれをむやみに使おうとすれば、かならずや身を滅ぼすことになる。したがって強い魔力は封印したうえで渡さねばならぬのだ。それでも予見の力が得られるだろう。前もって困難が知れればおおいに役立つ」

「ありがとうございます」
「それでは魔力を封印（ふういん）するための呪文をともにとなえてもらおう…」
ジハドにうながされ、ぼくは杖のクリスタル球の部分に手をのせた。そしてジハドに続いて封印の呪文を復唱（ふくしょう）した。
「この杖に与えられしその力を閉ざせ**《レエカニミヤハノモシレマウリヨミヤ》**」
勇剣士の剣と楯、賢者の地図、そして予言者の魔力の杖。ぼくはひとつひとつたしかめながら受けとった。したくはととのった。
「では力のかぎり」
「ゼルダを救えるのはそなただけじゃ」
ぼくは一礼してひきさがった。

⇩ **52へ**

2

79より

峠を越え、ルトの町にはいった。にぎやかな町だ。多くの店が軒を連ねている。いくつかのぞいてみるとするか。なにか耳よりな情報が得られるかもしれない。

⇩ **58へ**

3

164より113より

ミドロの沼を去り、さらに山あいの道を踏み進んで行く。途中、トンネルをみつけた。地図を確かめると、海岸につうじているようなのだ。道をこのまま進めばもうひとつの沼に出る。モルゲの沼だ。どっちへ行くべきだろうか…。

●トンネルを抜けて海岸に出る。 ⇩ **153へ**

●モルゲの沼へ行く ⇩ **59へ**

4

《フェアリーマジック＊はなす》

…なにも起きない。違うようだな。 ⇩ **45へ**

5

53より135より

鍵を差し込む。簡単にまわった。

ぎぎぎ…扉のひらく音にさも興味なさそうなようすで賢者がふりむく。

「ぼくです、ハルデナーハ様」

白いひげのなかに驚きが、続いて喜びの色がひろがった。

「おお、リンク！　無事だったか」
　ぼくはこれまでのことを話した。
「東の塔へ行くとな…ダヌークより聞いたじゃろう、ジハドめのあやつる死人の群れが守っておるということを。容易には近づけぬぞ。しかしじゃて、ほっほ…わしがいいものをやろう。なに、牢獄暮しは暇での、こういうものを作っておったんじゃ」
　ハルデナーハは寝台の下から妙なものを引っ張り出してきた。ちょうど、大きな鳥の骨組みのようなもの…。
「…なんです、これは？」
「人を鳥のごとくに空をかけさせる道具じゃ」
「まさか！」
「わしの長年の成果じゃ。ほれ、ここにまたがっての、このペダルを踏むとこう翼がはためく…」
　ぼくはあっけにとられながらそのしかけの説明を聞いた。
「…というわけでじゃ、ここからこれに乗って行けば東の塔のテラスまで一直線よ。ふむ、天佑じゃの。今日は風向きがぴったりじゃわい」
「…それは助かりますが…その…うまくいくでしょうか」
「わしはこのとおり年寄りじゃからの、試したくとも試せないのじゃ。しかしこのペダル

を踏み続けておればなんとかうまくいくだろうて」
「……」
「リンクよ、ダヌークやその手勢を率いて西の塔におもむけば大勢の犠牲がでるぞ。おまえにはわかっておろう。ジハドを、そしておまえ自身の影を倒すのは…」
ぼくは黙ってうなづいた。
「ところで王は？」
「この塔のいちばん上の部屋じゃ。なんとか無事でおられるようだ」

●王にあいさつをしておこう ⇩ 119へ

●それより東の塔へ行こう ⇩ 128へ

6

82より

ミドの町へ行ってみた。が、町は荒れはて、人の気配はまったくなかった。ぶきみに静まりかえっている。いったいどうしたというのだろう…ぼくは崩れかけた建物のなかをのぞいてみた。
地下室がある。かすかな音がした。足音をしのばせて、降りてみる。ものが腐りかけたような異臭が…暗がりに目がなれてくるにしたがい、その部屋の片隅にころがっているものの正体が明らかになった。死体だ！　生前の姿もわからぬほどに腐りはてた…う、動い

た⁉

「うわっ！」

どろどろのばけものがぼくに気づいた。かたほうの目だまはなく、もうかたほうはとけかけ、たれさがっていた。人間にちがいなかった。が、ぶきみなうなり声をだして起きあがった！

●いそいで逃げる ⇩ 162へ

●たたかう ⇩ 99へ

7

141より

やつの挑発(ちょうはつ)に乗ればゼルダ姫を傷つけてしまう。それだけは避けなければ。しかしこのままやつをのさばらせはしない、なんとしても。なんとしても、だ。

ぼくは最後のかけに挑戦した。剣を胸に当て…!!

そしてそれは…成功した。

ゼルダは床の上に崩(くず)れ落ちた。やつはゼルダから離れた。苦悶する。黒い闇のオーラが消えていく…。狼狽(ろうばい)するジハド。

ぼくは消えゆく力をふりしぼり、ゼルタの手から落ちたやつの剣ににじり寄る。

そしてジハドめがけて投げつけた…。

⇩ 179へ

8

151より

「あーん、もう乱暴なのね」
泉のなかから飛びだしてきたものがある。妖精だ！
「泥だらけになってしまったわ」
妖精はぶるぶるっとからだをふるわせて、ぼくの目の前に飛んできた。
「でもたすけてくれてありがとう。あら、あなたリンク？　仲間からきいているのよ、力になってあげなさいって。ちょっと乱暴なやりかただったけど、いいわ、お礼に妖精の魔法をおしえてあげる」
やった。寄り道したかいはあったぞ。
「いいこと？　これから言うことばをよくおぼえておいて。あなたはそのことばに魔法をかけることができる…**《みたす》《かえす》《はなす》**…この3つよ」
「ことばに魔法をかけるだって⁉」
「そう、あなたがどうしようもなく困ったときにこう叫ぶの、**『フェアリーマジック＊みたす』**ってね。すると**《みたす》**ってことばが魔力を持つの。じっさいになにかをみたしてくれるはずよ」
「なにを…？」

「それはそのときしだいだわ。なんにもみたすものがなければ《**みたす**》を使ってもなにも起こらない。みたすものさえあればなんでもみたしてしまう、たとえそれがあなたの望まないものであったとしても…だから使いかたには気をつけることね」
「ぼくにうまくできるだろうか…」
「自信がなければそのときわたしを呼んでくれてもいいのよ。これにそおっと息をふきかけてから『**ティンクル**』って叫ぶの。わたしの名前よ」
妖精、ティンクルはそう言って、青い羽をとりだした。
「ありがとう、いつか力になってもらうよ」
「じゃ、気をつけて」
ぼくは青い羽をもらって泉の妖精にわかれをつげた。

⇩ 124へ

9

36より 125より

ぎ、ぎぎぎ、ぎぎ…重い扉を押しあける。
…古い、打ち捨てられた神殿のはずだった。が、いままさになにかの儀式(ぎしき)がはじまろうとしているかのように、祭壇の両わきでかがり火があかあかと燃えていた。床には3つの三角形を組み合わせた魔法陣…これは⁉
「う…」

9■　やつだっ！　地獄からよみがえったやつがいた！「…今度はおまえが地獄へ行く番だ」ガノンの濁(にご)った目が不気味に光る…。

そのなかにやつがいた！　これが地獄からよみがえったもののありさまか!?　身はただれ、腐りはて…

「よく…きた…リンク…今度はおまえが…地獄へ行く番…だ…」

黄色い濁(にご)った目がぼくを見てゆがんだ。

ガノンめ…ふたたび地獄へもどるがいい！

⇩ 88へ

10

122より

右側の洞窟へはいる。

狭い通路を手探りで進んでいると、曲がり角の向こうに明りが見えた。なにかいる…！

ぼくはその気配に…

●立ち止まり、息をひそめてようすをうかがう ⇩ 174へ

●そこにいるのはだれだ!?　と叫ぶ ⇩ 70へ

●剣をにぎりしめて飛び出す ⇩ 109へ

11

155より

「そう、よかったわ、それを持ってて。それは命のうつわなの。あなたはここに閉じ込められるとき命の力を奪い取られてしまったの、もうひとりのあなたにね。でもだいじょう

ぶ、もうわたしがあげたから」
「それでここから出るには？」
「このブラック・トライフォースは邪悪な力であなたをつつんでいる…妖精の呪文のなかには使えるものがあるんだけど…」
妖精の呪文か！　ええと、ぼくはたしか…

●虹色の羽を持っている　⇩ **33へ**

●青色の羽を持っている　⇩ **102へ**

12

74より

なにも起きなかった。
「リンク…」
どこからかティンクルの声が聞こえた。
「残念だわ、とても。この呪文が使えたらどんなによかったかしらね…。ブラック・リンクを封印するために使えたはずよ。でももう遅い。あなたはそのために必要な道具を持っていないんですもの。残された道はひとつだけ…ああ、でもとても言えないわ…リンク、あれはあなた自身なの…」
「ぼく自身…」

そのときブラック・リンクがゼルダ姫の体をあやつり剣をふりあげた。思わず受けとめ、なぎはらう。と、ゼルダの体はいともたやすく倒れてしまった。

「あ…」

ぼくは恐ろしい罠(わな)にはまったことを思い知った。やっと戦おうとすればゼルダ姫を傷つけてしまう…ゼルダの腕に走ったあかい血のすじが、ぼくの目に焼きついた。そして突如(とつじょ)、ティンクルの言い残したことばの意味に思い当たった。

ブラック・リンクはぼく自身なのだ。

⇩ 138へ

13

132より

モルゲの沼から道はサリアの町に続いている。サリアの町のむこうはもうデスマウンテン。いよいよ近づいてきた。急ごう。

⇩ 112へ

14

88より

腐肉(ふにく)の塊と化したガノンはかわそうともしなかった。ぼくの剣は一撃でやつの首をはね落とした。

⇩ 98へ

15

137より

「ウィンクルー！」

ぼくは叫んでみた…が、だいたい妖精なんかに会ってはいないのだ、名前なんか知るはずもない…よけいなことに気を取られたすきに斧の攻撃が…！

かろうじて剣でふりはらう。だが剣は折れてしまった。

「またしてもおれは戦い続けねばならぬのか…」

最後の斧は楯をまっぷたつに断ち割って、ぼくの体に突き刺さる…⇩

ゲーム・オーバー

16

119より

ブラック・リンク…闇へかえす…邪力(じゃりょく)の杖…あのぼくに貸してくれた杖か⁉　しかしどうやって？

ぼくは賢者のいる部屋へもどる。あの妙な鳥をまねした道具に乗って東の塔へ行くためだ。とにかくもう行ってみるしかないのだ。

「ふむ。ではあの窓から…」

ハルデナーハの空飛ぶ鳥の道具を東の塔に向いた窓にのせた。そしてぼくがまたがる。

「いいか、ペダルを踏み続けるのじゃ。休んではいかん。ではいくぞ…ほれっ！」

ぼくの返事も聞かずにハルデナーハはうしろから押した。
「わ、わわぁー！」
ぼくを乗せた鳥もどきの道具は高い塔の上から滑りだした。
「ペダルを踏むのじゃ！」
ハルデナーハが叫んでいる。ぼくは夢中で脚を動かした。ふわり、と風の流れに乗る。
「やった！」

⇩
160
へ

17

114より

ぼくは逆手に持った剣を下向きにかまえ、目の前の砂の動きを見つめていた。
ずざざざーっ、とそいつが砂をかき乱す瞬間、ぼくは足もとの砂を蹴(け)っていた。そしてずんぐりとした青黒いからだの半分もあらわれないうちに、そいつのかたい甲らがおおっていない頭の部分に思いきり剣を突き立てたのだ。…うまくいった。
だがそれで終わりではなかった。やつらは群れをなしていたのだ。…次々とぼくの周囲の砂が波打った。息つく暇もなくぼくは砂を蹴(け)り、ジャンプし、攻撃を繰り出した。が、それもうまくいったのは数匹めあたりまでだ。もうタイミングが合わなくなってきた。
「くそ…」
深入りしすぎたことを後悔した。まだやってくる…

⇩
140
へ

17■　足もとの砂がはねあがる。リーバーがそのずんぐりとしたからだの半分もあらわさないうちに、急所の頭頂めがけて剣を！

18

44より

「おお、待っていたぞ、リンク」
思いがけず返事があった。そして驚いたことに、その声には聞き覚えがあった。

⇩
101
へ

19

107より

「そうか、持ってないのか。じゃ、もう歌はやめだ。でもせっかくだからついでに踊りもみせてやるぜ」

⇩
115
へ

20

38より

身を伏せ、警備兵たちのいる小屋の脇をよつんばいで抜ける…案の定、彼らは気づかない。ぼくは簡単に塔のなかへ侵入。

⇩
163
へ

21

86より97より

まさに斧が投げられようとしていた。ぼくは妖精の呪文をとなえる…
「**フェアリーマジック＊かえす!!**」

⇩
42
へ

22

155より

「まあ！　ゼルダ姫のペンダントを持ってないですって⁉　困ったわ。あなたにエネルギーをあげられない。あなたはここに閉じ込められたとき命の力を奪いとられたのよ、もうひとりのあなたにね。だからわたしが命の力をあげないとあなたはよみがえれない。それにはゼルダ姫のペンダントが必要だったの。あれは命のうつわだったのに…」

「じゃあぼくはもう⁉」

「ええ、わたしにはどうしようもないわ。あなたが自分でだいじなものを手放しちゃったんですもの。しかたないわね。さようなら、リンク」

そしてぼくはブラックトライフォースのなかではてしない夢を見続ける…

⇩ ゲーム・オーバー

23

98より

「城は邪の手に落ちたぞ」

ぼくは恐ろしい光景を見ていた。逃げまどう宮廷の人々、追うのは異様なありさまの…ゾンビと化した兵士たち！　王も、賢者ハルデナーハも、勇剣士ダヌークですらもつぎつぎと捕えられ…

「意のままだ……くくく……」
そしてゼルダ姫の姿が大きく浮かびあがった。
「ほれ……」
炎に苦しむゼルダ姫！
「それとも……」
ゾンビどもが群がる……！
「やめろーっ!!」
ぼくは剣をにぎりしめる。
「くくっ……むだだというのに……しかしおれを倒さねば……」
ガノンの手がゼルダ姫をのまぼろしをつかむ。そしてにぎりつぶした。
ぼくは……

●思わず捨身(すてみ)でガノンに飛びかかる ⇩ 139へ

●ふたたび剣をふりあげおどりかかる ⇩ 117へ

24

167より

泉へ行ってみた。きこりの言ったとおり、岩や土砂が崩れて泉は見るかげもない。なるほどこれは困るにちがいない……。

●だがそんなことにかかわりあっているひまはぼくにはないのだ ⇩67へ
●先を急いでいるが上の岩をとりのけるくらいならなんでもないだろう、そうすれば水は汲みだせる ⇩151へ
●どうせなら徹底的にとりのけておいてあげよう ⇩118へ

25

103より

「ティンクルー!!」
おそわったとおり、ふうっと羽に息を吹きかけ名前を呼んだ。と、目の前に小さなきらめきがあらわれた。そしてそのなかからあの妖精の姿が!
「なあに、なにか力になれて?…きゃ、こいつら呪われた死人たち! リンクったらぐずぐずしないで、呪文を早く…光が逃げちゃうわ!」
岩の切れ目から差し込む光が消えかけていた。立ちすくんでいたゾンビたちが待ちかねて身じろぎをはじめる。
「呪文はなんだっけ⁉」
「前にいちど使ったわね。だから残りはよっつ…さぁ早くどれか選んで!」
●《みたす》 ⇩89へ
●《はなす》 ⇩78へ

●《とかす》 ⇩ 142へ

●《おもいだす》 ⇩ 159へ

26

143より

塔のなかへ飛び込んだ。無我夢中で長い螺旋の階段をかけのぼる。許さない、許さないぞ…。

最上階にたどり着く。肩で息しながらぼくは扉を蹴破った。

「来たか」

ジハドが待っていた。

⇩ 91へ

27

158より

「もしもし、そこのお若いひと…」

うす暗い小屋の前で呼びとめられた。

「凶相があらわれておりますぞ。ちょっとわしに観させてみなされ」

占い師だ。

「いや、あの、けっこうです…」

「まあまあ、そんなことは言わずに、見料はただじゃ。どうも気になる卦が出ておる、

用心するにこしたことはなかろうて。ささ…」
ぼくはむりやりすわらされた。
「ふぅーむ…南の方角がよくないわい…むむ？　これはいったいなんの卦かの…黒い三角の石がおまえさんをのみこむ、とでた」
えーっ⁉　黒い三角の石にのみこまれるだって？　なんだってんだよ。ぼくは首をひねりながら占い師のところを立ち去った。

●もういいかげんに先へ進もう ⇩ 65へ

●もっと耳よりな情報があるかもしれない ⇩ 131へ

28

69より

「あたりよ、リンク！　ブラックライトフォースの呪縛がとけるわ。もうすこししたらあなたはここから抜け出せるはずよ。出たところは…」
ティンクルの声が遠のいていく。ぼくの体は暗い闇のなかを波にもまれるみたいにゆれている。広さも大きさもなんにも感じないのだけど、どこかへぐんぐん引っ張られているようだ。しだいに感覚がもどってくる…あかりが！

⇩ 46へ

28■　闇の次元でまどろんでいたぼくはようやく目覚める。感覚が、力が、しだいによみがえる。邪の呪縛がとけていく…。

29

75より

「ティンクル！」
ぼくは妖精を呼びだした。まだ2つの呪文が残されている。どっちだ？　ここで使えるのは…。
「だめ、使えないわ、どちらも。リンクよく考えて。相手はあなた自身なの。自分を殺す？　それでもいいわ。だけどもうひとつ方法があるのよ…封印(ふういん)するの、あっちのあなたを。それをするには…きゃっ！」
ティンクルが言い終わらないうちに、ブラック・リンクが剣をふりおろしてきた。ぼくはかろうじて受けとめる。が、ティンクルはあわてて姿を消してしまった。
ティンクルのことばが気になる。ここはいったんかわしたほうがよくはないか…と、そこへブラック・リンクの次の攻撃、肩をかすめた！　くそっ!!

●すぐさま逃げよう　⇩105へ
●とりあえずすこし戦ってようすをさぐろう　⇩66へ

30

153より

「ねえ、もうやめてやりなよ」
「やだよ。ぼくたちが見つけたんだもの、ぼくたちの勝手だろ」
「そんなこと言わないでさぁ。かなしそうじゃないか」
「じゃ、30ルピーくれる？　それでほんもののタコ釣りに行くから」
「…いいよ」
ちぇ、くそガキどもめ。
「ううう…すまねえな、リンク…ついでにこの足をほどいてくれないか…ああ、ありがとうよ」
「かたなしだな」
「おれたちはいま沖合いの島に隠れ棲む身だからな。ちょっとようすを見に出てきたんだが…そうだ、ちょうどいい、島に寄ってかないか？　そこの港に船を隠してあるんだ。今日はみんなで宴会やってるぜ」
オクタロックの宴会だって？

●おもしろくなりそうなので行ってみる ⇩ 90へ

●ながくなりそうなのでやめておく ⇩ 76へ

31

112より

とても迷ったのだ。ゼルダ姫のペンダントを手放していいものだろうか…しかし男は情報をくれるという、ただ売るわけではないのだ…ぼくはペンダントをはずして男に渡した。

「こういう言伝えがある…魔王は再び銀の矢に打たれて滅び去る」 男はそういい残して去って行った。

⇩
73へ

32

「どうしてあなたが…ここに⁉」

その人物は予言者ジハドだった。

「おまえに力をかすためだ」

「力…?」

「ガノンは隣の洞窟にひそんでおる…だが入口には鍵がかかっておろう。おまえはその鍵のありかを知らぬ。わしは予言の力によりそれを知った。そしてそれ、ここにこうしてたずさえてきたというわけだ…」

予言者はそう言うと、黒いローブの下から小さな鍵をほうってよこした。

「…これをどこで?」

「そんなことはどうでもよかろう…早く行かぬか、魔の眠りに封じ込められたゼルダ姫は一刻ごとに衰弱しておるぞ…」
ジハドはぼくを正面から見据えて言った。
そうだ、ゼルダ姫…。
「わかりました」
ぼくは予言者に背を向けた。
「邪を憎め。おまえの持てる限りの力で憎むのだ。怒りの炎を燃やすがよい…」
予言者が呪文のようにそんなことばを呟くのが聞こえた。

⇩ 125へ

33

11より

ええと、たしか3つが残っていたぞ。そのなかの…

⇩ 45へ

34

74より

「リンク…」
ゼルダ姫が口をひらいた！　ブラック・リンクに乗り移られ、ぼくにむかって剣をかまえたままゼルダ姫がはなしはじめた!!

「だめよ。なにをしてもむだ。このブラック・リンクは滅(ほろ)びない。あなたの影なんだもの。これはあなた自身…ああ、だめ…逃げてリンク！　でないとあなたを傷つけてしまう。わたしにはどうしようもないの…ああ、助けてリンク!!」
ゼルダ姫の体をあやつり、ブラック・リンクが襲いかかってきた。思わず楯で受けとめ跳ね返す。
「ああっ」
床に倒れたゼルダの悲鳴！　なんてことだ、やつと戦おうとすれば…
「やめろおーっ!!」
ぼくは体をおりまげ、震わせた。
おそろしい混乱のなかでひとつのことばがこだました。それは今ゼルダ姫の口から出たことば…これはあなた自身…あなた自身…ぼく自身…？　そうか。
ぼくの考えはあることに行き着いた。

⇩
138へ

35

162より82より

入り江に流れ込む川のほとりにやってきた。これをたどってモルゲの沼に行くつもりだ。運良く川岸に小舟があるのを発見。それに乗って行けば少しは楽だ。ところで、川の向こう側には王家の墓がある。舟があるとなれば寄って行ってもいいのだが…

●まっすぐモルゲの沼に行く ⇩ 123へ

●王家の墓に寄ってみる ⇩ 129へ

36

101より

予言者ジハドに鍵をもらい、右側の洞窟を出た。そしていよいよ、ガノンの待つ左側の洞窟へ…。

階段をおりて行く。深く、長い。ぼくの足音だけが虚ろに響く。

地の底に呑込まれるかと思うほど降り続け、ようやくはてが見えてきた。重々しい扉がある。そうか、これだな…。

鍵は鍵穴にぴったりと合った。

⇩ 9へ

37

118より

「あー、たすかったわ！」

泉のなかから小さな生き物があらわれた。妖精だ！

「まあ！　あなたがたすけてくれたのね？　魔物にとじこめられて困っていたのよ。ありがとう！」

妖精は虹色の羽をふるわせながら、うれしそうにぼくのまわりをとびまわった。

37■「まあ！　あなたがたすけてくれたのね？」泉のなかから妖精があらわれた。虹色の羽をふるわせ、とてもうれしそうだ。

「あら、あなたもしかしてリンク？　仲間からきいてるわ、通りかかったら力になってあげなさいって。でも逆にたすけてもらったわね。じゃ、うんとお礼しなくっちゃ！　ええと、そうね…あなたに妖精の魔法をおしえてあげる」
やったぞ。やっぱり途中でなげださないでよかった。
「いいこと？　これから言うことばをよくおぼえておいて。あなたはそのことばに魔法をかけることができる…**《みたす》《とかす》《おもいだす》《はなす》《かえす》**…この5つよ」
「ことばに魔法をかけるだって⁉」
「そう、あなたがどうしようもなく困ったときにたとえばこう叫ぶの、**『フェアリーマジック＊みたす』**ってね。すると**《みたす》**ってことばが魔力を持つの。じっさいになにかをみたしてくれるはずよ」
「なにを…？」
「それはそのときによるわ。なんにもみたすものがないときに**《みたす》**を使ってもなにも起こらない。だけどなにかみたせるものがあればたちどころにみたしてしまう、たとえそれがあなたの望んでいないものであってもね…だからフェアリーマジックを使うときにはよほど考えないと」
「ぼくにうまくできるだろうか…」

「だいじょうぶよ、あなたなら。でももしそのときことばを忘れてたりしたら、わたしを呼んでもいいわ。これに息をそおっとふきかけてから『**ティンクル！**』って叫ぶの。わたしの名前よ」

妖精、ティンクルはそう言って、背中にあるのと同じきれいな虹色の羽をくれた。

「ありがとう、いつか力になってもらうかもしれない」

「気をつけてね」

ぼくは虹色の羽をもらって泉の妖精にわかれをつげた。

⇩ 124へ

38

126より96より

入口に立つ数人の見張りの兵士。が、油断しているとみえて、脇の小屋の前に集まりなにやら雑談にふけっている。うまくすれば、こっそりと入口へ忍び込めそう。

●だが念のため倒してから進もう ⇩ 54へ

●そのまま忍び込もう ⇩ 20へ

39

120より

白く細い手に剣を持ち、ゆらりと歩みよるゼルダ姫。目覚めているときと同じしぐさで少し首をかしげ、ぼくを見る。だがその目は虚ろ。あやつり人形。ブラック・リンク、や

つだ、これはやつの化身…ぼくはそう念じながら城壁の石のように重い剣をかまえようとする…

できない!! ぼくにはできない…この剣をゼルダ姫にふりおろすことなどできはしない!! どうすればいいのだ…。

⇩ 100へ

40

「…これは?」

クリスタル球に映(うつ)ったガノンはおぼろげな影だった。しかしそのなかにある黒くはっきりとした三角形の影は…? わからない。とりあえずガノンを倒さなければ…

⇩ 88へ

41

105より

「ゼルダ姫を…」

「東の塔か…あそこにはジハドが墓場からよみがえらせた死人の兵士どもがうろついている。しかしこちらも人数を集めて攻めれば…」

「姫さえ奪い返せばこっちのものだ」

「やってみよう」

⇩ 121へ

42

21より

なるほど！　まさかとは思っていたけど、こんなふうになるなんて……！
ぼくがその妖精の呪文をとなえた瞬間、ことばが魔法の力をもった……飛んできた斧をぼくの楯が、はねかえしたのだ！

⇩
132へ

43

124より

リーバーが出没しているというタンタリ砂漠にむかう。
リーバーは砂中に棲み、近づくものがあればすぐそばまで引き寄せておいてから姿をあらわす。そのときずんぐりしたからだを回転させながら出現するので、周囲の妙がすりばち状にうずまき流れる。そのなかに捕えられた獲物はもう逃げられない。もがけばもがくほど、砂のすりばちのなかに引き込まれてしまうのだ。
だがよく気をつけていれば、リーバーがあらわれるときには砂の表面がかすかに揺れる。そのの中心を捉え、やつが姿をあらわした瞬間、素早く一撃を加えるのが倒すこつだ。そのときを逃せば、まず間違いなくやつのえじきとなるだろう。
剣と楯をくれた勇剣士ダヌーク秘伝のわざをためしてみるいい機会だ。ぼくは気をひきしめて砂漠地帯に踏みこんだ。

⇩
114へ

44

83より

右側の洞窟へはいる。
狭い通路を手探りで進んでいくと、曲がり角の向こうに明りが見えた。なにかいる……！
ぼくはその気配に…
●**立ち止まり、息をひそめてようすをうかがう** ⇩ **175へ**
●**そこにいるのはだれだ!?　と叫ぶ** ⇩ **18へ**
●**剣をにぎりしめて飛び出す** ⇩ **93へ**

45

33より

どれだ？
●**《とかす》** ⇩ **69へ**
●**《はなす》** ⇩ **4へ**
●**《おもいだす》** ⇩ **169へ**

46

28より

…あかるさに目が眩む。どこだ、ここは？　あの闇の領域から脱出できたのか⁉　広い部屋、居並ぶ人々…ここは宮殿の王の間…なぜここに⁉

「おお…やつだ…」

「…リンク…」

「リンク⁉」

「またしても…⁉」

人々のざわめき…どうしたんだ、なぜそんな顔でぼくを…？　遠まきにぼくを見つめる人々にひろがる不審というより恐怖の色。一歩二歩ぼくが歩みかけるとあとずさりする。なぜだ⁉

そのとき玉座のほうからすべてをあきらかにするしわがれ声が…

⇩
157へ

47

61より92より

曲がりくねった山道をわけ入り、ミドロの沼に出た。立ち枯れの草木を沈めて緑色によどんだ水、たちのぼる沼気…。いかにもいやなものがひそんでいそうだ。ぼくはそろそろと沼のまわりを歩いた。と、水面の一部がぶくぶくとあわだつ。足をとめ、剣を抜いてみ

47■　緑色によどんだ水、たちのぼる沼気。いかにもいやなものがひそんでいそうだ。と、水面の一部がぶくぶくとあわだつ…。

がまえる…。
ざばっ！　なにかが水面から顔をだした。ぶじゅじゅっ！　同時にどろどろした液体が飛んできた。かろうじてよける。毒液を吐くゾーラだ！　こいつにやられると、この沼の水のようにからだがどろどろにとけてしまう。そしてゾーラがそれをするのだ…毒液を吐きかけられる前に一撃を加えなければ！
ゾーラは獲物(えもの)がそばにいるかぎり、なんどでも水面から顔を出し狙ってくる。ぼくは水面のあわだちをさがしながら、剣を…

●ふりかぶってかまえる ⇩ 113へ

●逆手(さかて)に持ってかまえる ⇩ 164へ

48

62より

「フェアリーマジック＊はなす！」
「リンク…」
ゼルダ姫が口をひらいた！　ブラック・リンクに乗り移られ、ぼくにむかって剣をかまえたままゼルダ姫がはなしはじめた!!
「逃げてリンク！　このままだとわたしはあなたを傷つけてしまう。どうしようもないの

…ああ、助けてリンク!!…」

ゼルダ姫の体をあやつり、ブラック・リンクが襲いかかってきた。思わず楯で受けとめはねかえす。

「ああっ」

床に倒れたゼルダ姫の悲鳴！ なんてことだ、ぼくは、ぼくは…

●残る呪文(じゅもん)をためしてみる　⇩130へ

●ゼルダ姫にかけよる　⇩141へ

49

97より

まさに斧が投げられようとしていた。ぼくは妖精の呪文をとなえる…

「フェアリーマジック＊とかす!!」　⇩77へ

50

161より116より

体をゆらせながらずっ、ずずっ、と輪をせばめてくるゾンビたち。ぼろぼろになってまとわりついた衣服のなかから腐りただれた皮膚がのぞく。まともに形をたもっているやつはひとりとしていない。まぶたがとけ、腐った目玉をむきだしにしているやつを思いきり蹴飛ばした。そいつはよろけ…よろけただけだ、倒れもせずすぐに体勢をたてなおしてつ

かみかかるかまえをみせた。いがいにしぶとい…ぼくはあわてて剣を抜きはなった。切りつける。腕がちぎれた。が、いささかもひるまない。べつのやつの手が肩をつかむ、ふりむきざまなぎはらう。ざっくりと胴体が裂けてしまう。だが倒れない…！　そうするうちにもわらわらとぼくに群がるゾンビたち…

●よおし、とことん戦い抜いてやる　⇩181へ

●だめだ、逃げよう　⇩103へ

51

124より

流れ者…なにか意外な事実が聞けるかもしれない。ぼくはラウルへの道を急いだ。丘を越えると町並みが見えてきた。

町の入口。広場に市がたっている。おおぜいの人がたむろし、なかなか活気にあふれている。だがやはり話題は魔物のことのようだ。

「死体が歩くそうじゃ…」

「恐ろしいことよのう、生きているものの脳みそをするというぞ」

「体がちぎれても死なぬそうな」

「砂漠もひどいというじゃないか。大きな砂虫があばれているそうだ」

「ミドロの沼へ行ったものがだれももどってこぬ…」

「おお、この町にもいつ魔の手がのびるものやら…」
ぼくは市をぶらつきながら、人々の話に耳をかたむけていた。そのとき、ぼくを呼びとめるものがあった。
「おい、そこの若いの。ひと勝負どうじゃな」
路上のかたすみにカードをひろげたじいさんがいた。
「あれ、あんたは…」
「もう山奥には住めなくなっての、逃げてきたんじゃ。しかし町もまんざらではないの、カモが多くての。ヒャヒャ、どうじゃ、ひと勝負？」
やれやれこのじいさんにはむかしうんとからかわれたものだ。
「悪いけどいまはそれどころじゃないのさ」
「またガノンをやっつけにいくのかい？」
「…あっさり言ってくれるね」
「おまえさんの負けに100ルピー」
「負けたらぼくは払えない、勝てば払わなくていい、どちらにしてもぼくの損はない、乗った！」
じいさんはにやりと笑う。
「宿屋へ行ってみるがいいぞ、昔なじみが健在（けんざい）じゃ」

ぼくはじいさんにわかれをつげた。

⇩
110
へ

52

1より

「リンクどの！…」
謁見の間を出たところで、ぼくはインパに呼びとめられた。ゼルダ姫の乳母である。
「姫のようすはどうなのです？」
「おお…あまりよくありませぬ。お眠りになったまましだいに弱っていらっしゃるように思われます…」
ぼくは唇をかみしめた。
「…いそがなければ」
「姫様はきっとあなた様を信頼なさっておいででしょう…その姫様のお気持ちをくんで、さしでがましいとは存じますが、わたくしはこれをおあずけしたいと思います」
「これは…」
ゼルダ姫が肌身はなさずつけているルビーのペンダントだった。インパはそれをぼくの首にかけてくれた。
「なにかの役に立つとも思えませぬが、お守りのつもりで…。姫様のお気持ちをおそばに」
「どんな武器よりも心づよい。感謝します…」

ルビーは血がかよっているかのようにほのかなぬくもりを持っていた。

「お気をつけて…」

インパに見送られながら、ぼくはゼルダの眠る城をあとにした。

⇩ 167 へ

53

163より

警備兵はあいかわらず小屋の前で油を売っている。ぼくはいきなりおどり出た。やつらは下っ端だ。あわてて手に手に剣をとるが、およびごし。次々と当て身をくらわせ、縛りあげる。

そのなかのひとりが腰に鍵束をぶら下げているのを発見。それを持ってふたたび塔の階段をかけのぼり、賢者の閉じ込められた部屋の前にもどる。

⇩ 5 へ

54

38より

ほんの下っ端のやつらだ。ぼくがおどりでたのを見るとあわてて手に手に剣を取ったが、およびごしのかまえ。敵ではない。つぎつぎと当て身をくらわし、縛りあげた。

なかのひとりが腰に鍵をぶらさげているのを発見。ふたつある。王と賢者が幽閉されている部屋の鍵に違いない。それを持って急いで塔のなかへ。

⇩ 135 へ

55

89より

「これは…」
その呪文(じゅもん)をとなえた瞬間、信じられないようなことが起こった。ぼくは思わずためいきをついた…うすれかけていた一条の日差しがふたたびその力をとりもどしたのだ。そして、ぼくのまわりのわずかな部分だけに投げかけられていた光の輪が、徐々にひろがりはじめた…
「やったわ、リンク！」
ティンクルの羽がきらきら輝いた。薄暗い洞窟のなかに光が…みちて…いく！
「やったぞ！」
闇の力に呪われた死人たちは光に灼(や)かれ、つぎつぎと土くれにかえっていった。

⇩
149へ

56

137より

そうだ…ティンクル！
ぼくは泉であった妖精のことを思いだしたのだ。泉をふさいだ岩をとりのぞいてやったお礼に妖精の魔法をおしえてくれたっけ。そのときもらった羽は…

55■　光が、光がみちていく！　その呪文(じゅもん)をとなえた瞬間、うすれかけていた日差しは力をとりもどし、洞窟のなかにみちていった。

●虹色の羽　⇩ 97へ

●青色の羽　⇩ 86へ

57

90より

島へ着いた。なるほど、浜辺に1ダースほどのオクタロックが車座になって騒いでいる。

「ぱぁーっといこうぜ、ぱぁーっと」

「おおい、酒がたりねえぞ」

「ちぇ、おれたちゃどうせよぉ……」

だいぶもりあがっているようだ。

「よう、せっかくリンクがきてくれたんだ、だれか芸でも見せてやりな」

「よおし、おれが…」

もともと赤いのにますます赤くなっているオクタロックのひとりが立ちあがった。

「歌がいいか？　それとも踊りか？」

「…ええっと、それはその…」

うう、困ったな。でもまあどっちかって言うと…

●歌をききたいと思う　⇩ 107へ

●踊りをみたいと思う　⇩ 115へ

58

2より

まず、屋台の食べ物屋に足がむいた。腹がへっていたこともあるのだが、数人の客がしきりにひそひそやっているのが気になったからだ。ぼくも皿を手にしてその輪のなかにはいった。

「モルゲの沼のうわさ聞いたか？」
「やっぱりあれはほんとうか？　ダイラがでるという…」
「わからない。なにしろ行ったものがだれも帰ってこないのだからな」
「とにかくもう近寄らぬほうがいいぞ」
「あの沼に通じるトンネルもふさいだほうがよくはないか？　まさかとは思うが、ダイラがやってこないともかぎらないからな」
「そのとおりだ」

モルゲの沼に通じるトンネルがあるのか。それは知らなかった。ルトの町の南には、険(けわ)しい山がひかえている。ここを越すのはひと苦労だろうと覚悟していたが。これは助かった。モルゲの沼の先はサリアの町だ。サリアの町はもうデスマウンテンのふもと…。

ぼくはそのトンネルの場所を聞いてから店を立ち去った。

●さっそくモルゲの沼にむかおう

⇩
65へ

●もう少し情報を集めてからにしよう

⇩ 158 へ

59

3より

そのまま山道を進んでいくと、やがてモルゲの沼が見えてきた。ぶきみに静まりかえっている…

⇩ 145 へ

60

103より

「ティンクルー!!」

おそわったとおり、ふうっと羽に息を吹きかけ名前を呼んだ。と、目の前に小さなきらめきがあらわれた。そしてそのなかからあの妖精の姿が!

「なあに、なにか力になれて?…きゃ、こいつら呪われた死人たち! リンクったらぐずぐずしないで呪文を早く…光が逃げちゃうわ!」

岩の切れめから差し込む光が消えかけていた。立ちすくんでいたゾンビたちが待ちかねて身じろぎをはじめる。

「呪文はなんだっけ⁉」

「前にいちど使ったわね、だから残りはこのふたつ…さぁ早くどちらかを選んで!」

●《みたす》

⇩ 89 へ

●《はなす》 ⇩ **78へ**

61

71より133より

モリブリンの宿屋をでて、ぼくはラウルの町をあとにする。道は3本に分かれていた。東に行けばパラパ砂漠、西へ行けばミドロの沼、南へ行けば港のある海岸にでる。ラウルの人々はこんなうわさをしてたっけ…砂漠には大きな砂虫がいる。ミドロの沼に行ったものはだれももどってこない…。港のある海辺にはかつてオクタロックがいたはずだ…。

●パラパ砂漠へ行ってみる ⇩ **146へ**
●ミドロの沼へ行ってみる ⇩ **47へ**
●港のある海岸へ行ってみる ⇩ **153へ**

62

100より144より

ここで妖精の呪文がいったいどう使えるというのだろう。わからない。が、とにかくまだふたつ残っている。

●《はなす》か？ ⇩ **48へ**
●《おもいだす》か？ ⇩ **130へ**

63

121より

土中から次々とゾンビの兵士どもがあらわれた。剣をふりかざしたおびただしい死者の群れ。しかしたいまつがやつらの襲撃(しゅうげき)をかろうじてかわす。

「どけっ！　腐った化物ども！」

「来るなら来い、灰にかえしてやるぞ！」

すきをみては襲いかかろうとするゾンビどもとせりあいながら、たいまつをかかげてじりじりと進む。

「いいぞ、このままなんとか…」

ダヌークがふりむいてにやりと笑いかけたとき、ぼくの頬に冷たいものが落ちた。

「…雨だ！」

⇩
143へ

64

155より

「まぁ！　ゼルダ姫のペンダントを持ってないですって!?　困ったわ。あなたにエネルギーをあげられない。あなたはここに閉じ込められたとき命の力を奪いとられたのよ、もうひとりのあなたにね。だからわたしが命の力をあげないとあなたはよみがえれない。それにはゼルダ姫のペンダントが必要だったの。あれは命のうつわだったのに…」

63■「どけっ！　腐った化物どの！」すきをみては襲いかかろうとするゾンビどものなかを、たいようをかかげてじりじりと進む。

「じゃあぼくはもう!?」
「ええ、わたしにはどうしようもないわ。あなたが自分でだいじなものを手放しちゃったんですもの。しかたないわね。さようなら、リンク」
そしてぼくはブラックトライフォースのなかではてしない夢を見続ける…

⇩ ゲーム・オーバー

65

58より158より27より131より

屋台にいた人たちから聞いた、モルゲの沼に通じるトンネルはすぐにみつかった。沼のぬしだというダイラのことを考えながら進んでいると、すぐに出口の光がみえてきた

⇩ 171へ

66

75より

黒い闇のオーラに包まれたもうひとりのぼく…ブラック・リンクとぼくはたがいに剣をかまえてにらみ合った。じりじりと相手との距離をはかる。やつはぼくが踏み込むのを待ちうけている。はっきりとわかる。だが…すきがない！　こっちの剣のかまえに応じて楯を巧(たく)みに持ちかえる。さあどこからでも…というように。うう、こんなふうに怖気(おじけ)づくなんてどうかしてるぞ…

その気持ちの乱れを察したかのようにブラック・リンクがおどりかかってきた！

「くっ…」

剣をかざして受け止める。が、息つく暇もなく次の攻撃！　二度、三度…剣と剣が火花を散らす…すごい力だ！　受け止めるたびにぼくはぐぐっとのけぞり、反撃の余裕(よゆう)すらなく退(しりぞ)いていく。そしてうしろに倒れた。が、かえってそれに救われた。バランスをくずした相手のすきを逃さず、思いきり足で蹴飛ばした。

飛び起きる。とにかくこんどはこちらから攻撃しなければ！

相手の意表をつくつもりで素早く低い体勢に移り、足のあたりをなぎはらった。ところがものの見事にかわされた。そしてふたたび攻撃をくりだしてきた。またしてもぼくは守勢にまわる…壁ぎわに追い詰められる！

「逃げろ、リンク！　この場は逃げるんだ！」

ダヌークが叫んでいる。そうだ、このままではジハドの思うつぼ。ぼくは楯でブラック・リンクの体を突き飛ばし…

●テラスのほうへ向かって逃げ出した　⇩176へ

●廊下(ろうか)のほうへ向かって逃げ出した　⇩105へ

67

24より

ぼくは岩にふさがれた泉をそのままにして先を急いだ。

⇩ 124へ

68

「ぐ…ぅぐっ…」

ぼくの足は床からはなれた。もがけばもがくほどガノンの指が喉にくいこむ…だめだ、もう…

そのときなにかかたいものがふれた。ちょうどガノンの胸のあたり…なにか突き刺さっている！　これは…!?

もうろうとしかけた意識のなかで、ぼくは最後の望みの綱をみつけた。これはかつてガノンを倒すのに打ち込んだ銀の矢…ぼくは必死でそれをつかみ、引き抜いた。

「ぐ…」

首をしめあげるガノンの指がほどけた。いまだ！　ぼくはその矢をにぎりしめ、ふたたびその胸に突き立てた。

「ぐぁっ！」

ガノンは床にのたうち倒れた。とどめだ！

「地獄へ…もどるがいい！」
ぼくは呪いのことばとともに、ありったけの力をこめて矢を押し込んだ。
そのとき、断末魔（だんまつま）のガノンの口から黄色いガスのようなものがぼくにむかって吐き出された！

⇩
165へ

69

45より

《フェアリーマジック＊とかす》
ああっ…体が！

⇩
28へ

70

10より

「おお、待っていたぞ、リンク」
思いがけず返事があった。そして驚いたことに、その声には聞き覚えがあった。

⇩
32へ

71

110より

「悪いけど…」
「ちぇっ、つきあい悪いな」

「ぼくは未成年なのさ」

「おやおや。ま、そう言うならしかたねえな。じゃ、せいぜい気をつけって行ってくれ。近道するならミドロの沼へまわるこった、ほんとだぜ」

ぼくは酒を買わずにすませてモリブリンにわかれをつげた。

⇩ 61へ

72

85より

暗闇の海へ小舟をこぎ出した。港の方向はだいたいわかっている。そんなに距離があるわけではないので不安はなかった。ところが大騒ぎして疲れていたため、ぼくは舟のなかで寝込んでしまったのだ。

気がつくと入り江を流されていた。あわてて地図でたしかめると、モルゲの沼につうじる水路であることがわかった。しょうがない。このままモルゲの沼にむかうとしよう。

⇩ 123へ

73

男たちとわかれ、先へ進む。無人と化したサリアの町をとおり抜け、いよいよデスマウンテンに…

⇩ 127へ

ぼくに残された呪文はふたつ。どう使えるのかわからない。どんなことになるかも。しかしゼルダ姫との戦いを選ぶぐらいなら…

●《フェアリーマジック＊はなす》を使う ⇩ 34へ
●《フェアリーマジック＊おもいだす》を使う ⇩ 12へ

75

157より

「…!?」

ぼくの足もとの影がすうっとのびた…と思うとそれがすっくと起きあがる…そしてぼくにむきなおる…!

なんてことだ! ぼくが、もうひとりのぼくがあらわれた…顔も姿も寸分たがわぬこのぼくが、黒い闇のオーラに包まれて!!

ジハドが言う。

「ふふふ、みずからの影に勝てるか、おまえ自身の生みだした邪に…」

ブラック・リンクが剣をかまえた。

「注意しろ、やつはてごわいぞ!」

75■　ぼくの足もとの影がすうっとのびた…なんてことだ！　ぼくが、もうひとりのぼくが黒い闇のオーラに包まれてあらわれた!!

ダヌークが叫ぶ。ぼくは…

●敢然と剣を抜きはなった ⇩66へ

●妖精の羽をとりだした ⇩29へ

76

30より

「いそがしいから遠慮しておくよ」

「そうかい？　それは残念だな。じゃ、またな。おっと、たすけてくれてありがとよ、ミドの町へ行くなら気をつけな」

ぼくとオクタロックは港へ行き、そこでわかれた。

⇩82へ

77

が、なにも起きない…しまった、呪文のえらびかたをあやまったようだ…楯を断ち割り、ぼくの胸に斧が深々と！

⇩**ゲーム・オーバー**

78

25より60より

かろうじてゾンビたちをぼくから遠ざけている一条の日差しが、いままさに薄れようとしていた。

「フェアリーマジック＊はなす！」
ぼくは叫んだ…

⇩ 108へ

79

140より
182より

タンタリ砂漠をあとにした。道はひとつだけ。ルトの町へ続いている。

⇩ 2へ

80

111より

「えっ…!?」
予言者ハルデナーハの貸してくれた魔力の杖をかざし、そのクリスタル球をのぞいてみた。すると驚いたことに、そこにはなにもうつっていなかった。なにも…いや、大こうもりの姿は見える。だが男の姿はかげもかたちもない。そいつがまた毒唾を吐きかけた。こうもりがはばたく。もしかして…

⇩ 154へ

81

161より

生きた死人たちは、ぼくを逃すまいと向きをかえる。が、足はそんなに早くはないようだ…。

⇩ 103へ

港から海岸線に沿って東へ行けばミドの町、西へ進めばモルゲの沼に通じる川に出る。

●ミドの町へ寄ってみよう ⇩ 6へ

●ミドの町へ寄らずに川へ行こう ⇩ 35へ

82

173より 76より 168より

…ついにぼくはもどってきた。デスマウンテン。ふたつ並びの岩。魔族の神殿。モルゲの沼であった鰐（わに）の戦士はなんて言ってたっけ…『ほんとうの魔族の支配者に会うことになろう…だがそれと知ったときにはもう遅い…おまえの力は邪の力に捧（ささ）げられるのだ…おまえが邪を生みだす』…これほど不吉なことばがあるだろうか。やつが、ガノンがいったいなにをたくらんでいると？　それともほかになにが？

ぽっかりと口をあけたふたつの闇…そう、ふたつの岩にはそれぞれに入口があったのだ。なかのようすをうかがってみる。右側は、曲がりくねった狭い通路がのびている。左側は、地下におりて行く階段がある。それ以上はわからない。

●右側へはいる ⇩ 44へ

●左側へはいる ⇩ 122へ

83

149より

84

ぼくはかけよる。出てくる前にやっつけなくては…剣を逆手に持ち、ずぶずぶとめった突きにしてやった。いくつかの体節がたしかにつぶれた。が、ゲルドアームはいったんあたまを出すと、つぶれた体節を残してまたもや砂のなかに逃げ込んでしまった。
くるか、もういちど⁉
ぼくはクリスタル球をとおして、あたりの砂を油断なく見わたした。

⇩ 183へ

85

115より134より

飲めや歌えのどんちゃんさわぎ。気がつくともうすっかり夜更け。そうだ、こんなことしてる場合じゃないぞ。
「舟をかりるよ」
「出かけるのか？　かまわないが夜が明けてからにしたほうがいいぜ…」
オクタロックがねむそうに言った。ぼくも思わずあくびがでる。
「海はまっくらだからな」

●それでも急いで出発したい ⇩ 72へ

●夜明けを待とうか ⇩ 168へ

86

56より

ことばが魔力をもつという…なんだかまだよくわからないがとにかく試してみよう。ぼくはあのときティンクルの言ったことをよく思いだしながら、使うべきことばを選んだ。
それは…

●《みたす》 ⇩150へ
●《かえす》 ⇩21へ
●《はなす》 ⇩106へ

87

176より

「おお、リンク殿！　ご無事でしたか…ええ、もちろんご無事でしょうとも、わたくしは信じておりました」
インパはぼくにかけ寄り目をうるませた。
「姫はどこに？」
「東の塔に閉じ込められています。お眠りになったまま…」
「魔物の呪いなどではなかった。ジハド…すべてやつのたくらみだ。ぼくはまんまと罠(わな)にはまった。そしていまなんの手だてもない…どうすればいい？　ゼルダ姫を救うには…そ

87■「おお、リンクどの！　ご無事でしたか…ええ、わたくしは信じておりましたとも」インパはぼくにかけより目をうるませた。

れにあの…もうひとりのぼく…ブラック・リンクを倒すにはどうすればいいのだ、インパ⁉」

「おお、わたくしには見当もつきません…けれどもハルデナーハ殿ならなにかご存じかも」

「賢者ハルデナーハ！　どこに、彼はどこにいる？」

「王様とともに西の塔に閉じ込められております」

「待っていてくれ、インパ。必ずジハドの支配をくつがえしてみせる」

無言でうなづくインパを残し、ぼくは城の西の塔をめざした。

⇩ 126へ

88

9より

ぼくは…

●剣をふりあげた ⇩ 14へ

●魔力の杖をかざし見た ⇩ 40へ

●フェアリーマジック…ととなえかけた ⇩ 172へ

89

60より25より

かろうじてゾンビたちをぼくから遠ざけている一条の日差しが、いままさに薄れようとしていた。

ぼくは叫んだ…

「フェアリーマジック＊みたす！」

⇩
55へ

90

30より

ぼくはオクタロックと港へ行き、そこから小舟に乗ってこぎだした。沖合いに小島があった。

⇩
57へ

91

26より147より

「めざわりなやつめ。おまえをどうしてくれようか！　姫もろとも魔の眠りにつけてやるか…ふむ、それがいい。だが、その前にたっぷりとブラック・リンクと戦え。おまえは怒りに燃え、復讐（ふくしゅう）の炎のとりことなっておろうが。それがいっそうやつを強くしてくれるわ」

ジハドが杖をふった。

ぼくはふたたび黒い闇のオーラに包まれたもうひとりのぼくがあらわれるのを見た。そ

れにむかってジハドが言う。
「やつの憎しみの炎を燃えあがらせろ、おまえはますます強くなれるぞ」
そのことばの終わらないうちにブラック・リンクの足が床を蹴った。
がきっ、と剣の鍔（つば）と鍔（つば）がなった。
「くぅぅ…」
剣を打ち合わせたままぼくはじりじりとあとずさる。すごい力だ。交差したふたつの剣が、ぐ、ぐ、ぐ、とぼくの顔面に迫る。壁におしつけられた。やつの剣を受け止めるぼくの手が震える。
「くそっ！」
思いきり足で蹴飛ばす。剣が離れる。が、やつは少しよろけただけですぐさまぼくの喉もとめがけて今度はまっすぐ突いてきた。かわす。切っ先は後ろの石壁を少し砕いた。ぼくは床を転がり次の攻撃を避けた。やつはそれをよみとり床をめがけて次々と剣を繰り出す。がっ、がっ、がっ、…石が砕け散る。ぼくの体がなにかにぶつかった。テーブルだ！
とっさにその脚をつかみ、振り投げた。
ようやくぼくは体勢を立て直す。息を整えるまもなく攻撃に転じる。が、やつはひらりとかわした。そしてつぎの部屋に続く扉のなかへすうっと消えた。
ぼくは扉をあけ、飛び込んだ。そして立ちすくむ…。

眠れるゼルダ姫がそこにいた。黒い影が消えていく……こんこんと眠り続ける姫の体のなかに。

「だめだ……やめろ……やめろおー！」

「ふふふ、どうする、リンク。やつは姫に乗り移ったぞ。姫をその剣で貫けるか」

ぼうぜんとたちすくむぼくのうしろでジハドが言った。ゼルダ姫が剣をかまえて立ちあがる……。ぼくはいったいどうすればいい⁉

●妖精の呪文に望みをたくす ⇩ 74へ

●ブラック・リンクの乗り移ったゼルダ姫と戦う ⇩ 156へ

92

183より

いたっ！　砂中でうごめくゲルドアームの姿が、クリスタル球をとおしてたしかに見えた。ぼくはかけよった。狙いはひとつ、あたまだ。砂がもりあがった瞬間、ぼくはありったけの力をこめて逆手に持った剣を突き立てた。

あたまをつぶされたゲルドアームはのたうちまわり、やがて死んだ。

「おお、あなたは勇敢なかただ」

心配そうに見守っていた砂漠の民が言った。

「ところで、どこへ行かれるおつもりじゃ？」

ぼくはデスマウンテンをめざしていることを話した。
「それはまた…」
ひとびとがざわめく。ひとりの老婆が歩みでた。
「あなたは知恵と力と勇気をお持ちじゃ、だが注意しなされ、光あれば影もある、光が強ければ強いほどその影は濃い、力もまた同じ、邪の力もあることを忘れなさるな」
謎めいたそのことばの意味を、ぼくはずっと後になって知ることになる…
「気をつけて行きなされ」
ぼくは砂漠の民にわかれをつげた。
道をひきかえし、ミドロの沼と海岸へ分岐するところにもどった。

●ミドロの沼への道を進む ⇩ 47へ

●海岸への道を進む ⇩ 153へ

93

44より

「やあぁぁあっ！」
ぼくは壁の向こうになにがいるとも確かめず、いきなり剣をふりあげ飛び出した。かがり火の前にたたずんでいた黒い影は、信じられないほどの素早さで身をかわした。
「おいおい、わしじゃ」

その人物がだれであるかわかり、いっそう意外な驚きにうたれた。

⇩ 101へ

94

112より

「お断りします」
ぼくはそくざにそう答えた。たとえどんなにとっておきの情報であろうと、ゼルダ姫のペンダントはなにものにもかえがたいのだ。
「へっ、そうかよ」
男は捨てぜりふを残して去って行った。

⇩ 73へ

95

165より

そいつがぼくの前にすっくと立った。
「ガノンはわしの呪力でよびさました。おまえにふたたび倒させるためだ。よくやったぞ、わしの筋書きどおりにな…」
予言者ジハド。いや、予言者などではない、邪をあやつる闇の司祭…
「わしはおまえのその体と怒りの心がほしかったのだ。おまえはガノンのあらわした邪を憎んだであろうが。怒りの炎を燃えあがらせたであろうが。その力はいまここにこうしてうずまいておる……」

95■ ジハドは祭壇の黒いトライフォースを指して言った。「ここにおまえの力を封じ込めた。そしてここから邪悪の力が生まれる…」

ジハドは祭壇を指し示した。そこには黒い三角形のタブレッドが据えられていた。
「邪のトライフォースだ。ここにおまえの力を封じ込めた。そしてここから邪の力が生まれる…光が強ければ強いほど影は濃い。ふふふ、おまえの生みだす邪の力は強いだろうて。それこそわしの求めていたものだ…さて、これは返してもらうぞ」
ジハドはそう言ってぼくの体を蹴り転がし、魔力の杖をとりあげた。
「予見の力などおまえに貸し与えるためのごまかしにすぎぬ。見るがいい、これはこうして使うものだ…」
ジハドは杖をふりあげ呪文をとなえた。
「……リンクよ、闇の戦士となってよみがえれ!!」
黒いトライフォースがみるみる大きくなっていく…いや、ぼくがのみこまれているのか!?
ぼくは意識が遠のく瞬間、なにか黒い影とすれちがったような気がした…

⇩136へ

96

105より

「王と賢者…なにか聞けるかも知れない。西の塔へ忍び込んでみよう」
姫を救おうにも、ぼくはなんの手だてもないのだ。
「それがよかろう。西の塔は警備が薄い。おまえひとりでもたやすく忍び込めるはずだ。

そのあいだにおれは東の塔を攻める準備をすすめておきたいが…？」
「たのむ」
「東の塔のまわりにはジハドのあやつる死人の兵士どもが群れている。やつらを蹴散（けち）らさねば…なんとか策を練ってみよう」
「ダヌーク…あとで落ち合おう」
　力強い援軍を得た。が、最後にブラック・リンクを倒すのはほかのだれでもない、このぼくだ。やつはぼく自身なのだから…。
　ダヌークとわかれ、ぼくはひとり西の塔に乗り込んだ。

⇩ 38へ

97

56より

　ことばが魔力をもつという…なんだかまだよくわからないがとにかく試してみよう。ぼくはあのときティンクルの言ったことをよく思いだしながら、使うべきことばを選んだ。
それは…

●**《みたす》** ⇩ 150へ

●**《とかす》** ⇩ 49へ

●**《かえす》** ⇩ 21へ

●**《はなす》** ⇩ 106へ

●《おもいだす》

98
14より

「く…くく…くくくくく…」

なんだって!? 首が、床に転がったガノンの首が笑ってる!!

「おまえ…知っておろうが…おれをこんなやりかたで倒せるはずがないことを…」

首のないガノンの体は手をのばし、うそぶく首を拾いあげた。そしてもとどおりくっつける…

「まんまと罠(わな)にはまりおって…これを見るがいい」

ガノンが両手をひろげると、ぼくの目の前にぼんやりと煙のようなものがひろがった。

煙はもやもやとうずまいて、その内部に不思議な中空をつくりだした。そこになにかが浮かびあがる。

⇩ 148へ

⇩ 23へ

99
6より

動きはにぶい。腐りかけた死体はぼくのひと太刀(たち)を浴び、よろめいた。ところが、その攻撃はまったく効いていなかったのだ。どろどろの体を引きずって、ひるみもせずにぼくのほうに迫ってくる。こんどは思いきり首のあたりを狙った。

死体の首がころがりおちた…た、倒れない！　首のない死体が手をのばしてぼくにつかみかかろうと…逃げよう！

⇩
162へ

100

120より39より

そうだ！　ジハドの杖!!

ぼくは王のことばを思い出した。やつの力はあの杖なのだ。あれさえ奪ってしまえばなんとかなる…考えている余裕はなかった。ジハドは油断している。ぼくがまんまと策にひっかかったと思って。くそ、本当にひっかかってしまうところだったぞ。ぼくはうちひしがれると見せかけてさっと振り返り、勝ち誇るジハドにおどりかかっていった。

「う…な、なにをする！」

「くそお…このいかさま師め！」

正当に戦えばこんなやつに負けるはずがない。ぼくはなんなくその杖を奪い取ってやった。

「ぬぬぬ…」

あきらかにジハドは狼狽（ろうばい）した。これでこっちのものだ…

「ふ…だがその杖をどうする？　おまえには使えまい、どうだ？」

「く…」

そこなのだ。しかしなんとかしてみせるぞ。

●クリスタル球をのぞけば… ⇩ **144へ**

●妖精の呪文が使えるかも… ⇩ **62へ**

101

「どうしてあなたが…ここに!?」
その人物は予言者ジハドだった。
「おまえに力をかすためだ」
「力…?」
「ガノンは隣(となり)の洞窟にひそんでおる…だが入口には鍵がかかっておろう。おまえはその鍵のありかを知らぬ。わしは予言の力によりそれを知った。そしてそれ、ここにこうしてたずさえてきたというわけだ…」
予言者はそう言うと、黒いローブの下から小さな鍵をほうってよこした。
「…これをどこで?」
「そんなことはどうでもよかろう…早く行かぬか、魔の眠りに封じ込められたゼルダ姫は一刻ごとに衰弱(すいじゃく)しておるぞ…」
ジハドはぼくを正面から見据(みす)えて言った。

そうだ、ゼルダ姫…。
「わかりました」
ぼくは予言者に背を向けた。
「邪を憎め。おまえの持てる限りの力で憎むのだ。怒りの炎を燃やすがよい…」
予言者が呪文のようにそんなことばを呟くのが聞こえた。

⇩ 36へ

102

11より

「妖精の呪文で使えるものがあるんだけど…残念ながらあなたは持っていないわ」
「ええっ！　どうしてだ？　たしかまだひとつ残っているぞ」
「**《はなす》**だったかしら？　そうよね。でもこれはここでは使えないの。なんの役にもたたないわ」
「そんなのないぜ、ひどいじゃないか。使えないようなものくれるなんて！」
「あら、わたしにあたるのはおかどちがいよ。わたしはお礼はきちんとしなくちゃ気が済まないたちだって言ったでしょ。お礼はお礼、あなたたちが泉を半分だけきれいにしてくれた分お礼をしたの」
そうか。あのときめんどうがらずに泉の水まできれいにしておけばよかったんだ…。
「というわけだから、ごめんなさい。じゃあ、さようなら、リンク」

そしてぼくはひとりブラック・トライフォースのなかで、はてしない夢を見続けるはめに。

⇩ゲーム・オーバー

103

50より81より

ぼくはまとわりつくゾンビたちの手をなぎ払いながら、逃げた。足は、あかりのもれる入口のほうに向かっていた。

ゾンビたちはいっせいにあとを追ってきた。ところが、その動きがはたと止まった。ふりむいてみると、はたして、ゾンビたちはなにかとまどっているように立ちすくんでいる…どうしたんだ？

ぼくはすぐにその理由に思い当たった。ぼくの立っている場所には、おりしも岩の切れめからひとすじのあかりが差し込んでいたのだ…そうだ！　やつらは光がきらいなのだ。だが…岩の切れ目はわずかだ、日差しはいまに途絶えてしまう…なんとかしなければ…はやく、はやくなんとか…

ぼくは妖精の魔力を使うことにした。が、ええと、ぼくが持っていることばは…くそ、あせっていて思い出せないぞ…そうだ、ティンクルを呼ぼう！

●ぼくは妖精にもらった虹色の羽をとりだして… ⇩25へ

●ぼくは妖精にもらった青色の羽をとりだして… ⇩60へ

104

130より

「ジハド！　ぼくは勝ったぞ、これでおまえの力はおしまいだっ！」
　闇の力をあらわす邪力(じゃりょく)の杖。ぼくはそれをゼルダ姫、いや、姫の体に乗り移ったブラック・リンクにむけて突き出した。邪の力は封印される、ぼくは自分自身の闇の力を封印するのだ…

「…ヤミヨリウマレシモノハヤミニカエレ!!」

⇩
184へ

105

66より29より

「リンク、こっちだ!!」
　ダヌークが腕をふっていた。ぼくはブラック・リンクの剣をかいくぐり、転がるように廊下(ろうか)を逃れた。
「いいぞ、本物のおまえがここにこうしているとなればジハドの支配をくつがえす望みもある。手勢も少ないがいくらかは集められよう。ともに戦えばあのブラック・リンクとてなんとか倒すこともできよう」
「ダヌーク…」
　やつを倒せるか、自分自身でもあるブラック・リンクを…どうやって…その不安は口に

しなかった。

「ところで王と賢者が捕われているといったな…どこに？　そしてゼルダ姫は⁉」

「おそらく…王と賢者は西の塔、姫は東の塔に」

「さがしに行こう」

●まず王と賢者をさがしに西の塔へ ⇩ 96へ

●まずゼルダ姫をさがしに東の塔へ ⇩ 41へ

106

97より86より

まさに斧が投げられようとしていた。ぼくは妖精の呪文をとなえる…

「フェアリーマジック＊はなす!!」 ⇩ 77へ

107

57より

「じゃあ、歌を」

「よしきた」

オクタロックはうたいはじめた。

「にーしのおいけにすんでいるわにさん　おのなげうまくてまいにちなげる　アソリャ

てつでもたちわるじょうぶなおのさ　ホレソレヤレソレアリャリャンホイ……」

ひぇ！

「ところでこの歌2番もあるんだけど酒がきれてきたな…おまえ酒なんかもってないだろ？　もう一杯ひっかけりゃうたえるんだがな」

●そういえばラウルの町でモリブリンに買わされたのがあった　⇩134へ

●持っていないね　⇩19へ

108

78より142より159より

…なにも起こらない！　まちがえたっ……が、もうおそい、岩の切れめから差し込む光は無情にも途絶(とだ)えてしまった。わらわらとゾンビたちが押し寄せる！

ぼくは剣をふりまわして対抗した。しかしこいつらときたら…腕がちぎれようが首がもげようがいっこうにひるまない……だめだ！　先を争うように群がり寄る死人どもが……ずたずたに切り裂こうが突きまくろうが…ぼくはとうとう力尽きた……

⇩ **ゲーム・オーバー**

109

10より

「やあぁぁっ！」

ぼくは壁の向こうになにがいるとも確かめず、いきなり剣をふりあげ飛び出した。かが

り火の前にたたずんでいた黒い影は、信じられないほどの素早さで身をかわした。
「おいおい、わしじゃ」
その人物がだれであるかわかり、いっそう意外な驚きにうたれた。

⇩
32へ

110

51より

町の宿屋へ立ち寄った。
「いらっしゃい…おや！」
「あれ⁉」
宿屋の主人はモリブリンだった。
「どうしたんだい、こんなところで」
「へっへ、穴ぐら暮らしはあきちまってよ、まっとうな商売をはじめたってわけさ。ところがよ、またぞろあいつらが悪さをはじめちまっただろ、おかげで風当りが強くってまいっちまうぜ。商売あがったりさ」
すっかり人間くさくなったモリブリンは肩をすぼめてみせた。このモリブリンは魔物一族なのだが、いわばはぐれもの、魔道に嫌気(いやけ)がさして隠れ住んでいたやつだ。
「なぁ、むかしすこしは世話してやっただろう？　一晩泊まって行かないか、安くしとくぜ」

「悪いがいそいでいるんだ」
「デスマウンテンに行くのか？」
「ああ。なにか知っていることはないのか？」
「あまりないね。いまはやつらとはつきあいがない。しかし今度のことはどうもふに落ちん、魔族ばかりのせいでもないように思うが…ま、おれがこんなことを言ってもだれも信用すまい」
「ん？　くわしく話してくれ」
「いやなに、おれもたいして知ってはいないのさ。こんな商売をしているといろんなうわさを耳にすることも多い。だがこのところ不景気でな、酒の一杯も売れやしない。おおそうだ、いい酒があるんだが、買ってかないか？」
　魔族のうらぎりもの、モリブリンはやけに商売熱心だ。

●つい酒を買わされてしまう ⇩ 133 へ
●かろうじて断わる ⇩ 71 へ

111

129より

きいっ、ききいっ、きぃっ、きぃっ、ききぃ、きぃぃぃぃぃぃ

谷間に深くはいりこんだころ、岩壁にあった洞穴（どうけつ）のなかから大きなこうもりが飛び出してきた。そしてひとりの男がぼくの行く手に立ちふさがった。人間のかっこうをしているが、こうもりそっくりだ。

「血がほしい…おまえの血だ…血をよこせ…」

男の上で大こうもりがはばたいた。と、こうもり男が唾をぼくにむかって吐きかけた。

「あっ！」

ぼくは身をかわし、それは地面に落ちていた木切れにかかったのだが、なんとその木切れはぶすぶすと燃え出したのだ。ぼくは剣を抜き、次の攻撃から身を守るため、素早くこうもり男に切りつけた。

ところが、手ごたえがない！　ぼくの剣は空をきったのだ。しかし相手はたしかに目の前にいる…どうなってるんだ!?　またぼくの足もとの小枝が毒の唾で燃えた。うう、こんなやつにやられてたまるもんか。ぼくはとっさに考えをめぐらせた…

●剣を逆手（さかて）にかまえて影を狙う ⇩ 178へ

●剣をこうもりにむかって投げつける（選択項目98ページに続く） ⇩ 154へ

111■「血がほしい、おまえの血だ、血をよこせ」行く手にたちふさがるエイクマンに切りつけた。だが、なんの手ごたえもない！

●魔力の杖のクリスタル球をのぞく

112

13より

サリアの町にさしかかる。道のむこうから、数人のひとびとが慌ただしくやってくる。手に手に大きな荷物をかかえている。ひとりの男がぼくをみとめてよびとめた。

「あなた、町へ行くつもりならおよしなさいよ、だれもいやしませんぜ。みんなあわをくらって逃げちまいましたからね。墓からよみがえった死人がおしよせてくるんですよ、あの山からね」

そう言ってデスマウンテンを指さした。サリアの町はその裾野(すその)だ。もうずいぶん前からひとびとが逃げ出していることはうわさにきいている。

「あなたがたは？」

「忘れ物をとりにきたんでさぁ」

男は連れのものたちと顔を見合わせてにやにやしながら言った。

どろぼうなのか…？

「おや、あなためずらしいものを持ってますね」

ぼくをじろじろながめていたべつの男が言った。

「どうです、そいつをゆずる気は？」

⇩
80へ

その男が指さしたのは、ぼくの首にかかったルビーのペンダント…ゼルダ姫のだ。
「もちろんただで、とは言いませんぜ。そう、こっちの銀のネックレスと交換するってのは？　あるいはとっておきの情報と引き換えでもいいですがね…」
ゼルダ姫のペンダントを…

●銀のネックレスと交換する　⇩166へ
●情報と交換する　⇩31へ
●手放せるわけがない　⇩94へ

113

47より

ぶくぶくと水面があわだって、ゾーラ出現の気配…ざばばっ！　少しの遅れもとることなく、ふりかぶった剣をうちおろす。がき！　手ごたえはあった。が、致命的な一撃にはならなかった。傷を負ったゾーラは水面下に逃げ込んだ。当分あらわれる気配はなかった。
ぼくはもうあきらめて沼を立ち去ることにした。

⇩3へ

114

43より

「そっちへ行くのはおやめなさい」
岩陰にへばりつくようにテントを張っている人々がいた。砂漠の民だ。
「あいつらはいま飢えています。われわれの家畜を食いつくし、さらにわれわれを狙って待ちかまえています。およしなさい」
「あなたがただって困っているのでしょう？　だれかが倒さねば…」
ぼくは制止をふりきって進んだ。あたりに逃れられそうな岩のひとつも見あたらなくなったとき、ざざざざ…とかすかに砂の流れる気配をかんじた。
くるぞ！　ぼくは動きを止め、周囲の砂を素早く読んだ。あそこだっ！　ぼくのちょうどまうしろの砂がふるえていた。ぼくはふりむき…

●剣をま上にふりかぶった ⇩ 182へ
●剣を逆手にかまえた ⇩ 17へ

115

57より19より

「そうだ、踊れ、踊れ！」
ほかのオクタロックもはやしたて、場はいっきにもりあがった。踊りに加わるものもあ

らわれ、オクタロックの島は宴たけなわ…。

⇩ 85 へ

116

161より

ぼくはゾンビたちの輪を突破した。薄暗い洞窟はまだ続く。が、相手は動作が鈍い、このまま振り切るつもりだった。しかし…ぼこ、ぼこ、ぼこっ！　行く手からゾンビたちが姿をあらわしたのだ。

「くそお…」

ぼくはゾンビの群れに取り囲まれた。

⇩ 50 へ

117

23より

激しい怒りにとらわれたぼくは、ガノンめがけてめちゃくちゃに剣をふりおろした。なんども、なんども…腐肉(ふにく)と黒い血が飛び散り五体はばらばらになった…が！

「くくく…」

ふたたび転がり落ちた首がぶきみに笑う。そしてちぎれた手首がぼくの喉もとめがけて飛んできた。

「うぐぅっ…」

ガノンはみるまに再生し、ぼくの首をおそろしい力でしめあげていた。

⇩ 68 へ

118

24より

「もうなんでこんなことしなきゃならないんだ…」
うんざりするような作業だった。なんどか途中でやめたくなった。が、前にずいぶんお世話になったわけだし…。やっとのことで水のなかの岩や土砂までかきだした。そうしてしばらくするともとどおり、きれいに澄んだ泉にかえった。そのとき…

⇩
37へ

119

5より

ぼくはいったんハルデナーハの部屋を出た。
王の幽閉(ゆうへい)された部屋はすぐに見つかった。
「リンクよ、わしはジハドの正体を見抜けなかった…」
王は語りはじめた。
「むかしこのハイラルに王家と対立する一族がいた。闇の力をあがめる一族だ。ハイラルの王位をめぐり長きにわたって争った。そして破れた。人々の多くが闇の力に味方しなかったからだ。その一族はやがて絶えたとされていた。しかし…そうではなかった。闇の力は代々人々を脅(おびや)かした。ひそかに命脈(めいみゃく)をつたえていたのだ。ジハドがその一族の末えいだったとはな…。やつがあの黒いトライフォースをあらわしたとき、わしははじめてそれ

を知った。あの黒いトライフォースと邪力の杖とが闇の一族の象徴じゃ。機をうかがっていたジハドはおまえというすぐれた力の持ち主を得て、闇の力を及ぼそうとした。それがあのブラック・リンク…。あのもうひとりのおまえは闇のトライフォースのなかから邪力の杖により生みだされた。リンクよ、道はひとつじゃ。闇より生まれたものは闇にかえすしかあるまい…」

⇩
16へ

120

160より

「めざわりなやつめ。おまえをどうしてくれようか！　姫もろとも魔の眠りにつけてやるか…ふむ、それがいい。だがその前にたっぷりとブラック・リンクと戦え」

ジハドが杖をふった。

ぼくはふたたび黒い闇のオーラに包まれたもうひとりのぼくがあらわれるのを見た。それにむかってジハドが言う。

「やつの憎しみの炎を燃えあがらせろ、それがおまえをますます強しくてくれるぞ」

そのことばの終らないうちにブラック・リンクの足が床を蹴った。

がきっ、と剣の鍔（つば）と鍔（つば）がなった。

「くうぅ…」

剣を打ち合わせたままぼくはじりじりとあとずさる。すごい力だ。交差したふたつの剣

120■「くうっ…」剣を打ち合わせたままじりじりとあとずさりする。すごい力だ。ブラック・リンクの剣を受け止めるぼくの手が震えた。

120

が、ぐ、ぐ、ぐ、とぼくの顔面に迫る。壁におしつけられた。やつの剣を受け止めるぼくの手が震える。

「くそっ！」

思いきり足で蹴飛ばす。剣が離れる。が、やつは少しよろけただけですぐさまぼくの喉もとめがけて今度はまっすぐ突いてきた。かわす。切っ先は後ろの石壁を少し砕いた。ぼくは床を転がり次の攻撃を避けた。やつはそれをよみとり床をめがけて次々と剣を繰り出す。がっ、がっ、がっ、…石が砕け散る。ぼくの体がなにかにぶつかった。テーブルだ！とっさにその脚をつかみ、振り投げた。

ようやくぼくは体勢を立て直す。息を整えるまもなく攻撃に転じる。が、やつはひらりとかわした。そしてつぎの部屋に続く扉のなかへすうっと消えた。

ぼくは扉をあけ、飛び込んだ。そして立ちすくむ…

眠れるゼルダ姫がそこにいた。黒い影が消えていく…こんこんと眠り続ける姫の体のなかに。

「だめだ…やめろ…やめろおー！」

「ふふふ、どうする、リンク。やつは姫に乗り移ったぞ。姫をその剣で貫(つらぬ)けるか」

ぼうぜんとたちすくむぼくのうしろでジハドが言った。ゼルダ姫が剣をかまえて立ちあがる…。ぼくはいったいどうすればいい!?

●ジハドに襲いかかる ⇩ 100へ

●ブラック・リンクの乗り移ったゼルダ姫と戦う ⇩ 39へ

121

41より

ぼくがよみがえったことにより、反ジハドの気運は高まった。ダヌークの手勢はかなりの数にふくれあがり、眠れる王家の姫君を奪い返さんとする一団が東の塔のまわりに集まった。手に手にたいまつをかざしている。死人の兵士どもを撃退するためだ。
おりしも空がにわかにかき曇る。ぼくはなぜかふといやな予感がした。しかしそれも一団の気勢にのみこまれてしまう。
「急げ！　姫さえ取り戻せばこっちのものだ」
「ジハドの支配をくつがえせ！」
「邪のものどもを追い払え！」
たいまつがあかあかと燃えあがった。なんとか突破できるかもしれない……。
「いくぞっ！」
ダヌークが腕をふりあげた。
「おお!!」
ときの声があがる。ぼくたちは塔にむかって走りだした。

⇩ 63へ

122

83より

左側の階段をおりて行く。深く、長い。ぼくの足音だけが虚ろに響く。地の底に呑まれるかと思うほどおりてきたとき、ようやくはてが見えてきた。

重々しい扉がある。が、あかない。調べてみると、小さな鍵穴がある。鍵がかかっているのだ。どうしようもない。

長い階段をひきかえす。右側の洞窟へはいってみよう。

⇩ 10へ

123

35より154より

水路を進んでいくと山あいにさしかかった。水草がおいしげり、舟を進めるのがむずかしくなってきた。水はよどんだ緑色、たちのぼる沼気…モルゲの沼にはいりこんだようだ。ぼくは岸辺に小舟を寄せ、おりたった。あたりはぶきみなほど静まりかえっている。

⇩ 145へ

124

67より37より8より

しばらく進むと道がふた手に分かれていた。森の出口だ。右はタンタリ砂漠、左はラウルの町へ通じるはずだ。賢者ハルデナーハにもらった地図を見る。書き込みがある。なになに…**《砂漠にリーパー復活のうわさ》《ラウルに流れ者》**うーん、どっちへ行ってみよ

うか？

●右の道を進んでタンタリ砂漠へ

⇩43へ

●左の道を進んでラウルの町へ

⇩51へ

125

32より

予言者ジハドに鍵をもらい、右側の洞窟を出る。そしてふたたび左側の洞窟の長い階段をおりた。

扉の前にもどり、鍵を差し込む…かちっ、とまわった。

⇩9へ

126

87より

城内はざわついていた。兵士たちが駆け回っている。物陰から物陰へと身をひそめながら西の塔をめざす。

「リンク！」

壁にへばりついて兵士の一団をやりすごしていたぼくの背中に声がした。ぎょっとして剣をかまえてふりむけば…

「ダヌーク！」

「無事でよかった！　本物のおまえがあらわれたのでジハドは動揺している。東の塔にた

てこもった。いや、姫に手出しはすまい。最後の切札だからな。しかし今がチャンスだぞ。いくらか手勢も集められそうだ。ともに戦えばジハドの支配をくつがえす望みは充分にある…やるか？」

「…もちろんだ。ダヌーク」

ぼくはまず西の塔へ忍び込むつもりであることを話した。

「それがよかろう。西の塔は警備が薄い。おまえひとりでもたやすく忍び込めるはずだ。そのあいだにおれは東の塔を攻める準備をすすめておきたいが…？」

「たのむ」

「東の塔のまわりにはジハドのあやつる死人の兵士どもが群れている。やつらを蹴散らさねば…なんとか策を練ってみよう」

「ダヌーク…あとで落ち合おう」

力強い援軍を得た。が、最後にブラック・リンクを倒すのはほかのだれでもない、このぼくだ。やつはぼく自身なのだから…。

ダヌークとわかれ、西の塔にたどり着く。

⇩
38へ

127

73より

デス・マウンテン…そのふところ深く、ふたつ並びの岩がある。そこにぼくを待つものが…。
古い墓地跡がある。谷間の道は、両側から岩棚(いわだな)がせりだして、ちょうど細長い洞窟のようになっている。日差しはほとんどさえぎられ、わずかに岩の切れめからうすあかりが届くだけ。暗く、じめじめした道だ。
朽ちはてた墓標(ぼひょう)や崩れた土まんじゅうのあいだを歩む足は、こころなしか早くなる。おかしいぞ、この堀かえされた土は新しい…いやな予感がたかまりきったとき…
ぼごごっ！　地面のなかからあらわれた手が、ぼくの足首をぐわし、とつかんだ…

⇩ 161へ

128

5より

「ふむ。ではあの窓から…」
ハルデナーハの空飛ぶ鳥の道具を東の塔にむいた窓にのせた。そしてぼくがまたがる。
「いいか、ペダルを踏み続けるのじゃ。休んではいかん。ではいくぞ…ほれっ！」
ぼくの返事も聞かずにハルデナーハはうしろから押した。

128■「わああっ」ぼくを乗せた鳥もどきの道具は高い塔の上から滑(すべ)りだした。「ペダルを踏むのじゃ！」ハルデナーハが叫んでいる。

「わ、わわぁー！」
ぼくを乗せた鳥もどきの道具は高い塔の上から滑りだした。
「ペダルを踏むのじゃ！」
ハルデナーハが叫んでいる。ぼくは夢中で脚を動かした。ふわり、と風の流れに乗る。
「やった！」

⇩ 147へ

129

35より

小舟を操り、険しい岩山のさしせまった対岸に渡る。王家の墓はその谷間にある。
谷の入口に近づいた。風が舞い、あたりの木立がざわめいている。なんとなく耳を澄ませていると、木々のざわめきはこんなふうに聞こえてならない…
《…えいくまんはこうもり…こうもりはえいくまん…えいくまんはこうもり…こうもりはえいくまん…》
気味の悪いささやく木々に見送られ、王家の墓の谷間を進む。

⇩ 111へ

130

62より48より

「フェアリーマジック＊おもいだす」
こんなのなにも起こるわけない…だいたいこの杖には封印がかけられているのだ、最初

にジハドがぼくに貸すとき、修行を積んでいないものが強い力を使うとかえって災い（わざわい）が起きるとかなんとか言って、呪文みたいなものをとなえさせたじゃないか…あれっ⁉

そうか！　おもいだした‼

耳もとでティンクルのささやく声がした。

「あのときの呪文をさかさまに！」

「あれは、ええっと…《レエカニミヤハノモシレマウリヨミヤ》…わかった！」

⇩ 104へ

131

27より

小間物屋（こまもの）へはいってみた。

「あれっ⁉」

「おやまあ！」

そこにいたのは、むかしくすり屋をしていたばあさんだった。なんども赤いくすりやら青いくすりやらを買いに走ったものだった…。

むかし話にはながさき、すっかり時間をくってしまった。もう早いとこ先に進まなくっちゃ…。

⇩ 65へ

132

42より

「なんと！」

やつは一瞬たじろいだ。ぼくはチャンスを逃さず反撃に出た。勇剣士ダヌークよりさずかった剣は、甲冑を貫き、その下の硬い鱗の皮膚に深々と突き刺さった。鰐の戦士はどう、と倒れる…と、そのすがたはみるみる人間のものに変わっていった。

「…おれごときを借り物の魔力で倒したとてよろこぶな…おまえは罠にかかった…知らぬだろうが…ほんとうの魔族の支配者を…あの山へ行けば会うことになろう…だがそれと知ったときにはもう遅い…おまえの力は邪の力に捧げられるのだ…おまえが邪を生みだす…」

そして言いわらないうちに、肉はしなび、はがれ落ち、ぼろぼろの骸骨となりはてた。

ぼくはその不吉なことばの意味を考えた。ほんとうの魔族の支配者？　邪の力？　ぼくが生みだす？　知るすべもない。だが思いもかけないことが待ち受けているにちがいない…しかしここでいつまでも迷っているわけには行かない、道はサリアの町へ続いている。サリアの町の向こうはもうデスマウンテンだ。

ぼくはモルゲの沼をあとにした。

⇩
13へ

133

110より

「しょうがないなあ、じゃ、1本だけだよ、荷物になるから」
「へへ、やっぱむかしなじみはありがたいね。まあまあ、そんないやな顔をしなさんなって。いつかなにかの役にたつかもしれないぜ」
「だってこれただの酒だろ？　こんなのなんの役に…」
「おお、いま思いだしたぞ。こんなうわさを聞いたことがあるぜ、王の重臣のなかにうらぎりものがいる…」
「なんだって⁉」
「王位を狙うやつがいるらしい」
「どういうことだ？　それはだれなんだ⁉」
「知らん、ほんとうだ。だがこの魔物騒ぎには裏があるとおれはにらんでいる」
うらぎりものね…ぼくは思わずモンブリンの顔を見た。
「ほれほれ信用してない」
「いや、そんなわけじゃないけど。うーん、なんだかわけがわかんなくなってきたぞ」
「とにかくだ、かりにガノンを倒しても油断はならないぞ」
「かりに、だって⁉」

134

107より

「いやいや…まあその、とにかく気をつけていってきな」
ぼくは酒を買わされてモリブリンにわかれをつげた。

⇩ 61へ

135

54より

「おお、こいつはいけるぜ、またうたいたくなった」
モリブリンから買った酒をやると、オクタロックはさらにのった。
「みなみのおやまはめがねをかけて　かぎかけて　ソレ　おへやのいりぐちかくしてた
ホイ　みぎのめはじめにこわしたら　ホホウ　ひだりめとうとうあけたとさ　アホレソレ
ヤレソレアリャリャリャンホイ……」
宴会はおおいにもりあがった。

⇩ 85へ

136

95より

螺旋(らせん)の階段が塔の内部をのぼっている。ほぼ八分目あたりまで進み、ようやくそれらしき部屋にたどり着く。重い石の扉に小さなのぞき穴がある。のぞいてみると、たしかに賢者ハルデナーハの姿が。

⇩ 5へ

136■「リンク、目を覚ますのよ、リンク！」暗い闇のなかで邪悪な夢のよろこびにひたるぼくの耳に、ティンクルの声がしのびこむ…。

暗い。自分の体も見えないほど暗い。体だって？　どこにあるんだ？　なんの感覚もない。だけどぼくはここにいる。ここはどこだ？　ぼくは…そう、夢を見ていたぞ。ながい、長い夢だった。おおぜいの人々を次から次へと追いかけ、傷つけ、そして殺した…なんて夢だ。おそろしい…いや、この熱く震えるような思いはいったいなんだ？　あの殺りくのときぼくはなぜあんなにも喜々としていた？　ぼくは…

…リンク…リンク目を覚ますのよ…リンク…

うるさいな。ぼくはまたあの夢の続きを見たいような気がしてるんだ…

「リンク、リンクったら！」

ティンクル…

「いったいいつまでそうしているつもり？　今あなたがどうなっているのかわかっているんでしょうね！」

そうだ、ぼくは…

「いったいどうなってしまったんだ？」

⇩
155
へ

137

145
より

追いつめられたぼくはこんなことを考えた、妖精でも助けにきてくれないだろうか？

とっさに思い浮んだ名前は…

●ティンクル ⇩ 56へ

●ウィンクル ⇩ 15へ

●なにも思い浮かばない ⇩ 152へ

138

12より34より

やつの挑発に乗ればゼルダ姫を傷つけてしまう。それだけは避けなければ。しかしこのままやつをのさばらせはしない、なんとしても。なんとしても、だ。

ぼくは最後のかけに挑戦した。

そしてそれは…成功した。

ゼルダは床の上に崩れ落ちた。やつはゼルダから離れた。苦悶する。黒い闇のオーラが消えていく…狼狽するジハド。

ぼくはゼルダの手から落ちたやつの剣ににじり寄る。

そしてジハドめがけて投げつけた…

⇩ 180へ

139

23より

剣は通用しない！　ここまできてぼくはなにもできないのか⁉　やつに思いのまま邪力をふるわせるのか⁉　不敵にせせら笑うガノン…激しい怒りにとらえられたぼくは剣をふ

り捨て、その喉もとめがけて飛びかかっていた。
指がずぶずぶと腐肉にくいこむ。歯をくいしばって、渾身の力を込める。だが…！
「くくく…」
ガノンは笑っていた。そして逆にぼくの首を…

⇩
68へ

140

17より

ところが、意外なことが起きていた。残りのリーバーはぼくにむかってきたのではなかった。仲間の死骸に群がり、なんと共食いをはじめたのだった。
ぼくはそのすきにかけだし、命拾いした。
「感謝します。これで当分やつらはなりをひそめていることでしょう」
心配そうに見守っていた砂漠の民が言った。
「ところで、あなたはなぜわざわざやつらに挑んだのです？」
「腕だめし、といったところです」
ぼくはデスマウンテンに行くつもりであることを話した。
「おお、それは…。うわさによれば、あの死の山あたりには数知れぬ死者がよみがえっているとか。死者は闇の毒気を呼吸するもの、闇がかれらを支配する…。あなたは剣の使い手のようだが、死者は剣では倒せない。気をつけなされ」

行く手を案ずる砂漠の民に礼を言ってわかれをつげた。

⇩
79へ

141

48より

ぼくは床に倒れたゼルダ姫にかけよった。と、いきなり立ちあがり剣をふる。そしてぼくはまたしてもかわす。ゼルダ姫の腕にあかい血のすじが！

「リンク！　だめ、だめよ。戦ってもだめ。たとえわたしが死んでもブラック・リンクは倒せないわ。だってこれはあなたの影なんだもの…あなた自身なのよ」

ゼルダ姫は悲痛な声で叫ぶ。その体はブラック・リンクにあやつられ、ぼくを狙って剣をかまえる。

「もうごめんだ…」

ぼくは体を震わせた。おそろしい混乱のなかでひとつのことばがこだました。それは今ゼルダ姫の口から出たことば…これはあなた自身…これはあなた自身…ぼく自身…？

そうか。ぼくの考えは突然あることに行き着いた。

⇩
7へ

142

25より

かろうじてゾンビたちをぼくから遠ざけている一条の日差しが、いままさに薄れようとしていた。

「フェアリーマジック＊とかす！」

ぼくは叫んだ…

⇩
108
へ

143

63より

なんということだ！

「急げ、もうすぐだ！」

「火が…!!」

ぽつりぽつりと落ちはじめた雨は、またたくまに激しいしぶきとなってぼくたちを襲った。たいまつの火がぶすぶすとくすぶり、次々に消えた。ゾンビどもが勢いづく。

「走れっ！　突破しろ！」

ダヌークが叫ぶ。

「わぁっ…」

あちこちで悲鳴があがった。ゾンビどもがわらわらと群がり寄る。消えたたいまつのか

わりに剣が握られる。が、ぼくはそれがいかにむだな試みであるかを知っていた。しかしそれでも切って切って切って切りまくる。くそ、入口までもうわずかだというのに…ぼくは塔を見上げた。

「…ジハド」

またしてもやつの罠にかかったのか⁉ ぼくは激しい怒りと後悔に身を震わせながら、塔のテラスにたたずむジハドを仰いだ。次々に力尽きゾンビの餌食(えじき)となる人々を、笑みを浮かべて見おろしているジハド…なんとしてもやつだけはこの手で…

「ダヌーク！」

ダヌークが数人のゾンビに迫られていた。

「行け、行くんだリンク！　このすきに…」

ダヌークはぼくをめざしてこようとしたゾンビを引きずり倒した。その後ろから別のやつが…！

「行けーっ…行ってジハドを!!」

●ぼくはダヌークの悲鳴に歯を食いしばって走りだした。 ⇩ **26へ**

●ぼくはダヌークのもとにかけもどった ⇩ **177へ**

144

100より

「ほっそれしかできまい。おろかものめ」

クリスタル球のむこうでジハドがあざわらう。そうか。やっぱり別の使いかたがあるんだな。となると妖精の呪文か？

⇩

62へ

145

123より59より171より

ぶん！　静まりかえった水面に注意をはらいながら歩いていると、いきなり耳もとの空気がうなった。そしてちょうど踏み出そうとしていた足もとの地面に、どすん音をたてて重いものが突き刺さった。斧だ。はっと振り向く。

木立ちのうしろから、手斧をかまえたやつがあらわれた。…そいつは鰐のあたまを持っていた。

「どこへ行く？」

斧をふりあげたまま言った。ぼくは油断なく楯をかまえる。

「ほほう、やる気だな。だが千年を経たこのおれの斧に勝てるか？　いまだかつておれを破ったものはおらぬぞ。おれはもうあきあきしている…倒せるものなら倒すがいい。だがおれも戦わぬわけにはいかぬ、さだめだからな…」

145■「千年を経たこの斧に勝てるか？　いまだかってこのおれを破ったものはおらぬぞ」鰐（わに）の戦士は不敵な笑みを浮かべた。

言いおわらないうちにふたたび斧が飛んできた。
ぼくは楯で身をかばいながらかわした…ところが！
がきっ！　斧がかすめた楯のはしが、すっぱりと断ち落とされてしまったのだ。
「…なぜだ⁉」
ぼくはあっけにとられて切口をみつめた。
「どんなものでもこの呪われた斧をかわすことはできまい」
まっとうに戦っては勝てそうにもなかった。

⇩
137
へ

146

61より

大きな砂虫が出るというパラパ砂漠へ行ってみた。岩山の陰にキャンプを張っている砂漠の民がいる。
「それはゲルドアームといいます。いくつもの体節からなる長い体を持っています。砂のなかにひそみ、近づくものがあればいきなりその姿をあらわすのです。人間などひとのみ…おそろしいことに、きわめてゆっくり消化されるため、のみこまれた人の苦しみの声がいつまでもいつまでも砂のなかから聞こえてくるといわれています」
人々のとめるのをふりきって、ぼくは砂漠の奥へ進んでみた。

こころなしか、砂が震えているようにかんじる。ごごご…とかすかな地鳴り。いるぞ！　砂のなかでからだをくねらせ近づいてくる…わかる…だがどこだ!?
ぼくは剣をにぎりしめて周囲の砂の動きを見つめた。ずざざざーっ！
うしろだ！

⇩
170へ

147

128より

「わ、わ、わ…！」
これ、どうやって止めるんだ!?　なんとかうまいぐあいに風に乗り東の塔まで飛んできた。もう目前…しかしぼくは止めかたを知らない！　だめだ！　ぶつかる!!
ぐわっしゃっ!!
塔に激突。が、さいわいそこはバルコニー。助かった。鳥もどきの道具の残骸(ざんがい)から立ちあがる。
目の前に入口があった。
「こざかしいまねをしおって。ふむ、どうせハルデナーハの爺(じじ)いの入れ知恵だろう。しかし捕える手間がはぶけたわ」
奥の部屋のなかでジハドが待ちかまえていた。
「ゼルダ姫を返せ」

ぼくは剣を抜きはなった。もうあとにはひけない。

⇩
91へ

148

97より

まさに斧が投げられようとしていた。ぼくは妖精の呪文をとなえる…

「フェアリーマジック＊おもいだす!!」

⇩
77へ

149

55より

「よかった！」
ティンクルがまだぼうぜんとしているぼくのまわりを飛びまわりながら言う。
「どう？　魔法ってすごいでしょ。うまく使ってくれてうれしいわ。あたしはお礼はきちんとしないと気が済まないたちなの。また役に立つはずよ。ええ、とってもだいじなときにね…」
そういうとティンクルは小さなきらめきの輪を残して消えてしまった。
とってもだいじなとき…そう、もうすぐだ。この洞窟を抜ければ…ぼくは気をとりなおし、出口をめざす。

⇩
83へ

150

97より86より

まさに斧が投げられようとしていた。ぼくは妖精の呪文をとなえる…

「フェアリーマジック＊みたす!!」

⇩77へ

151

24より

とてもたいへんな作業だ。これをまっとうにやっていたんでは時間がいくらあってもたりやしない。先を急ぐのだ。ぼくは考えてうまい案を思いついた。上をふさぐおもだった岩だけをとりのけ、あとのかけらや土砂(どしゃ)は泉のなかに落とし込んでしまえばいい…というわけでぼくは手っとり早くかたずけた。泉の水はすこし濁(にご)ってしまった。そのとき…

⇩8へ

152

137より

よけいなことに気を取られたすきに斧の攻撃が…! かろうじて剣でふりはらう。だが剣は折れてしまった。

「またしてもおれは戦い続けねばならぬのか…」

最後の斧は楯をまっぷたつに断ち割って、ぼくの体に突き刺さる…⇩**ゲーム・オーバー**

153

61より3より92より

海岸に出た。砂浜を行く。しばらく進むと、数人のこどもたちが騒いでいるのにであった。なんだろう、見に行ってみよう…

「やーい、このタコ！」

「みろよ、こいつ泣いてるぜ」

「足むすんじゃおっと」

こどもたちの輪のなかでさんざんいじめられていたのは…オクタロック！　あーあ、こいつも改心したというのに…

●まぁ、むかし悪さをしたのでしかたがないか、ほうっておこう ⇩173へ

●かわいそうなのでこどもたちにやめさせよう ⇩30へ

154

111より80より

《えいくまんはこうもり…こうもりはえいくまん…》 谷間の入口で聞いた不思議な木々のざわめき…そうか！

いちかばちか、ぼくはこうもり男の頭上で舞う大こうもりを狙って剣を投げつけた。

ぎぎいぃぃぃぃぃぃ！　大こうもりはくし刺しとなって地面に落ちた。と、同時にこうも

153■「やーり、このタコ！」「足むすんじゃおうぜ」砂浜でこどもたちがオクタロックをいじめていた。

り男エイクマンの姿は消えた。断末魔のこうもりが言う…
「…デスマウンテンは…ひかりをみたしてくもりのちはれ…くもりのままならおまえはおしまい…ぞんびにのうみそすすられろ…」
そしてたちまち灰と化した。
デスマウンテン…ここはもうそのふところ。しかしここからは高い絶壁にさえぎられて先へは進めない。
ぼくは王家の墓の谷間をあとにした。川へもどってモルゲの沼へ通じる水路へと小舟を進める。

⇩
123へ

155

136より

「ここはブラックトライフォースのなかなのよ。あなたはジハドのたくらみで閉じ込められてしまった。あなたが見ていた夢…いいえ、あれは夢じゃないわ、もうひとりのあなたがやっているすべてほんとうのことなの。早くそこから出て。あなたがこうしていたうちにたいへんなことになっているのよ」
ティンクルの声がぼくにだんだん正気をとりもどさせる。
「出るったって、ぼくには自分の体がどうなっているのかもわからないんだ」
「じゃあ、わたしのいうとおりにやってみて。まず右手だけを動かすの。そおっとね。だ

いじょうぶ、ちゃあんとあるんだから。だんだん感覚がもどってくるはずよ。いい？　そして上にあげてみて。自分の首のあたりをさわる…そう。で、そこになにがある？　それがわかればあなたはすっかり自分をとりもどせるはずよ」

ええと、ぼくの首には…

●ゼルダ姫のルビーのペンダント **⇩11へ**

●サリアの町で交換した銀のネックレス **⇩64へ**

●なにもない **⇩22へ**

156

91より

白く細い手に剣を持ち、ゆらりと歩みよるゼルダ姫。目覚めているときと同じしぐさで少し首をかしげ、ぼくを見る。だがその目は虚ろ。あやつり人形。ブラック・リンク、やつだ、これはやつの化身…ぼくはそう念じながら城壁の石のように重い剣をかまえようとする…

できない!!　ぼくにはできない…この剣をゼルダ姫にふりおろすことなどできはしない!!　やはり、呪文にたよるしかないのか!?

⇩74へ

157

46より

「まい戻りおったか…しかし遅すぎたの。もうおまえの出る幕はないぞ」
ジハド！　そしてその玉座(ぎょくざ)のうしろにはあの黒い三角形…かつてそこに掲(かか)げられていた知恵と力のトライフォースにかわり、邪のトライフォースが！　そうか、ぼくはあのなかから…

「こやつに用はない、捕(と)らえろ！」
ジハドは兵士たちに怒鳴った。ぼくは身がまえる。が、兵士たちはとまどっている。そのなかからひとりが歩みでた。

「リンク…まことのリンクか⁉」
「ダヌーク！」
「おまえはまことのリンクなのだな⁉」
「それはどういう意味だ？　このぼくがいったいほかのなにものだという？　どうなっているのだ？　おしえてくれ、ダヌーク」
「話してやるがいいぞ、ダヌーク、最後のみやげにな。どうせこやつはおしまいだ…」
ジハドは歪(ゆが)んだ笑みを浮かべて言った。
「リンク…」

ダヌークが語りはじめた。

「ハイラルはすべてこの男、ジハドの思うままだ。王と賢者を幽閉し、みずから王位についた。姫も…ゼルダ姫も眠ったままだ。この人々を人質とされてはだれもそむけはせぬ。それになによりも…おまえの力が恐ろしい…いや、デスマウンテンからこの男とともに戻ってきたおまえ…もうひとりのおまえだ。おまえは邪の力の象徴、あの黒いトライフォースの守護戦士となり、やつが人々を恐怖で支配する手となり足となっている…」

「もうひとりのぼくだと!? そんなことが!!」

「ふっ、ふはははは…リンク、忘れたか? 闇の戦士となってよみがえれ…わしがおまえに邪の命を与えてやったのを。そうじゃ…やつと戦ってみろ、もうひとりの自分とな。ふむ、これはおもしろい…」

ジハドはそう言うと、杖をさっとふりあげた。ぼくに貸し与え、そしてデスマウンテンでとりあげたあの魔力の杖。それは邪の力をあやつる道具だったのだ。

「ふ…はたして影が勝つか光が勝つか…ゆけ、ブラック・リンクよ!」

ジハドの声がとどろきわたった。

⇩ 75へ

158

58より

今度は骨董(こっとう)屋をのぞいてみた。

「これはなんですか？」

店のなかのものをいろいろ眺めていてふと目についたのが、三角にとがった白っぽい石のかけら。なんのへんてつもないのに、やけにうやうやしく箱にいれてかざられていたのだ。

「おお、お目が高い。それはまことに珍しいものですよ、きっとうちにしかおいてございませんでしょうな」

「だからなんなんです？」

「それはダイラの歯でございますよ、お客さま」

「ええ!? ダイラってあのモルゲの沼のぬしだっていう…？」

「もちろん！ ほんもの、ほんものでございますからね」

「ワニかなんかの歯みたいだな」

「そりゃそうですとも、ダイラはワニの化身ですから。もとは人間だったともいわれていますがね。ダイラはおそろしゅうございますよ、人間にもどりたいのにもどることができないから憎しみのあまり人間を見れば襲うのですよ、ダイラにであって無事に逃げのびた

ものはひとりもおりません」
「…じゃあどうしてこれがここに？」
「…それはまぁ、つまりうちは骨董屋でございますからね」
うさんくさいおやじが魔よけに買っていけとすすめるのを断わって、店をでた。さて…

●そろそろモルゲの沼にむかおうとするか
⇩ 65へ

●もっと情報を集めてみたい
⇩ 27へ

159

25より

かろうじてゾンビたちをぼくから遠ざけている一条の日差しが、いままさに薄れようとしていた。
「フェアリーマジック＊おもいだす！」
ぼくは叫んだ…
⇩ 108へ

160

16より

「わ、わ、わ…！」
これ、どうやって止めるんだ!? なんとかうまいぐあいに風に乗り東の塔まで飛んできた。もう目前…しかしぼくは止めかたを知らない！ だめだ！ ぶつかる!!

ぐわっしゃっ!!

塔に激突。が、さいわいそこはバルコニー。助かった。鳥もどきの道具の残骸（ざんがい）から立ちあがる。

目の前に入口があった。

「こざかしいまねをしおって。ふむ、どうせハルデナーハの爺（じじ）いの入れ知恵だろう。しかし捕える手間がはぶけたわ」

奥の部屋のなかでいつの間に来たのか、なんとジハドが待ちかまえていたのだ。⇩ 120 へ

161

127より

死人が墓からよみがえる…ゾンビだっ！　腐れただれた手首はがっちりとぼくの足音をつかんで放さない。剣でなぎはらう。

ぼこっ！　べつの手があらわれる…ずざざっ…ぼごご…ぼごっ！　つぎつぎとあたりの土がはねあがる。

ぼくはたちまち10数人のゾンビどもに囲まれた。ぎこちない動きでぼくにつかみかかろうとしたやつの下をかいくぐり、ゾンビたちの輪を破って逃げ出す。と、やつらもいっせいに向きを変えた。まるで磁石に引き寄せられるように一団となって追ってくる…⇩ 50 へ

●たかが10数人のゾンビ、斬り捨ててやる（選択項目140ページへ続く）

161■　ぼこっ！　ぼこっ！　次々と地面の土がはねあがる。土中から腐りただれた死人どもがよみがえる！

●動きは鈍そうだ、このまま洞窟の奥へ向かって走ろう ⇩116へ
●思わずあかるい入口のほうに向かって逃げてしまう ⇩81へ

162

6より
99より

ぼくはじりじりとあとずさりした。ゾンビはぼくを追って階段をのぼってくる。が、途中ですくんだように動かなくなった。

…なぜだ？　ぼくは建物の入口のところでふりかえり、少ししてその理由に気がついた。おもてはあかるかった。その日差しが、階段からこっちには届いていたのだ…ゾンビはあかりがきらいらしい。たすかった。

それにしてもここはもう立ち去ったほうがよさそうだ。

港への道をもどり、海岸線を西に進む。 ⇩35へ

163

20より

螺旋の階段をのぼる。ほぼ八分目あたりまでのぼった。小さなのぞき穴のついた扉がある。なかをのぞくと賢者ハルデナーハがいた。が、重い石の扉には鍵がかかっている。うかつだった。鍵は下にいる警備の兵士が持っているに違いない。とりあげてこなければ。

階段を引き返す。 ⇩53へ

164

47より

ぶくぶくとあわだつ水面を見つめ、ゾーラがそのみにくい甲冑魚（かっちゅうぎょ）の顔をのぞかせる瞬間を待つ。剣の切っ先は下向き、ちょうどあわだちのまんなかをとらえている。ざざぶっ！

逆手（さかて）に握りしめた剣をまっすぐに突きおろした。ぎゅぎゅえ…奇怪な声を発してゾーラはくし刺しになった。やったぞ。

そのとき、断末魔（だんまつま）にのたうつゾーラが…

「…ダイラのおのが…おまえをたちわろう…ダイラは呪われたいにしえの…戦士…」

不吉なことばを残して息絶えた。

ぼくは沼をあとにする。

⇩
3
へ

165

68より

「うっ…!?」

黄色いガスを浴びた瞬間、ぼくの体は凍りついたように動かなくなった。これはどういうことだ…

「くくくく…」

不吉な笑いを残してガノンは灰と化してゆく…それがいつのまにかべつの声にすりかわ

った。
「ふふふ、思うつぼだ…」
この声は…!! ぼくは突然事実を悟った。デスマウンテンで待ちうける罠(わな)とはこれだったのだ、ほんとうの敵はこいつだったんだ…

⇩
95へ

166

112より

なにかいわれがあるのかもしれない。ルビーのペンダントを銀のネックレスと交換して男たちとわかれた。

⇩
73へ

167

52より

デスマウンテンはハイラルの南のはてにある。遠い道のりだ。途中いろいろな場所に立ち寄ってみなければならない。賢者ハルデナーハの言うとおり、すこし情報を集めておく必要があるのだ。剣と楯、それに魔力の杖を持っているとはいうものの、どこにどんな罠(わな)があるかわからない。デスマウンテンのどこにガノンが待ち受けているのか、ガノンを倒すにはどうすればよいのか、はたしてゼルダ姫の眠りはとけるのか…ぼくはまだあまりになにも知らなすぎる。うまく有益な情報を得られればいいのだが…。
そんなことを考えながらぼくがまずたどりついたのは森。ここを抜けないことにはハイ

ラルのどこへも行けない。先は長い。暗くならないうちに抜けてしまおう。なんどもきたことがあるのでもう道はすっかりわかっている。ぼくは急ぎ足で先へ進んだ。

ほどなく、道端でしゃがみこんでいる老人に出会う。森に住むきこりのようだ。ぼくをみとめると声をかけてきた。

「おまえさん、泉に行っても水は飲めないぞ」

「泉がどうかしたんですか？」

以前ずいぶんやっかいになったもんだ…。

「岩や泥ですっかりふさがってしまっておるのだよ。どうしてあんなことになっちまったのか…。困ったもんだ、あれはこの森でたったひとつの泉なのじゃ。もうここには住めなくなるわい」

年寄りのきこりはそう言うと、大きなため息をついた。

⇩ 24へ

168

85より

ひと眠りし、夜が明けてから出発した。小舟をこいで港へもどる。

⇩ 82へ

170■　砂のなかから５メートルあまりの巨大ミミズが姿をあらわした。目のないあたまのさきがぼくをのみこもうと３つにわかれた。

169

《フェアリーマジック＊おもいだす！》

…なにも起きない。違うようだな。

⇩ 45へ

170

146より

ふりむいたときには、砂のなかから5メートルあまりの巨大ミミズが姿をあらわしていた。それでも体のなかばはうもれているらしかった。そいつはかまくびをもたげる蛇のように、目のないあたまをぼくのほうにふりむけた。そのあたまのさきが3つにわれた。ぼくをのみこもうとひらいた口なのだ！

周囲の砂がまいあがった。ぼくは力いっぱい剣をふった。

意外にもろく、胴体がちぎれた。ところが、そいつは死ななかった。あたまのついているほうのやつだ。のたくりながら砂のなかに逃げ込もうとしていた。そしてそのからだのちぎれた部分からは、あらたな体節（たいせつ）がのびかけていた。

砂のなかで機をうかがっているにちがいなかった。ずずず…とあたりの砂がぶきみにうなる。いったいどこからあらわれる⁉　わからない！

このときぼくははっとあることを思い出した。予言者ハルデナーハの貸してくれた魔力の杖、強い力は封印されているが、予見の能力があると言っていた。もしかして…！　ためしてみるちょうどよい機会だ。
ぼくは杖をかざし、クリスタル球をとおして周囲の震える砂地を視た。すると…

⇩ 183へ

171

65より

ルトの町からトンネルを抜け、モルゲの沼に出た。緑色によどんだ水面は、ぶきみなほど静まりかえっている。

⇩ 145へ

172

「だめっ！」
ぼくが呪文を口にしようとしたとき、どこからかティンクルのささやくような声が聞こえてきた。
「だめよ、ここでは呪文は使えないわ。使ってもむだ。なにも起きない。もっとあとよ、あとで使うの…」
あとだって!?　あとっていつだ!?　じゃあこの場はいったい…

⇩ 88へ

173

153より

こどもたちにいじめられているオクタロックを横目に港へ急いだ。沖合いに島があるのだが、船はなかった。道はふた手にわかれている。

⇩
82へ

174

10より

息をころして壁にへばりついていたぼくの目の前に、いきなりぬっと黒い影が立ちはだかった。ぼくはあわてて剣をふりあげた。だが…

「…あなたは!?」

意外な驚きにうたれ、剣をおろすのもしばし忘れた。影の主は思いがけない人物だったのだ。

⇩
32へ

175

44より

息をころして壁にへばりついていたぼくの目の前に、いきなりぬっと黒い影が立ちはだかった。ぼくはあわてて剣をふりあげた。だが…

「…あなたは!?」

意外な驚きにうたれ、剣をおろすのもしばし忘れた。影の主は思いがけない人物だった

のだ。

⇩
101へ

176

66より

ブラック・リンクの剣をかいくぐり、転がるようにしてテラスに出た。が、行き止まり。てすりから身を乗り出すと、地面ははるか下。とても飛び降りることはできない。しかし下の階のテラスにうまくすれば引っかかりそうだ。ぼくは思いきっててすりを越えた。テラスの床にぶら下がり、はずみをつけて内側に飛び降りた。

そこは小さな窓のある部屋の外。のぞいてみると…

「インパ！」

ゼルダ姫の乳母が閉じ込められていた。窓をこじあけ侵入（しんにゅう）する。

⇩
87へ

177

143より

「ダヌーク！」

ぼくはゾンビどものまっただなかに切り込んだ。ちょうど力尽きたダヌークがゾンビのひとりに頭を割られたところだった。逆上したぼくは死にもの狂いで剣をふりまわす…が、とても勝ち目はなかった。ゾンビに剣は通用しないのだ。やがてぼくは力尽き…

⇩
ゲーム・オーバー

178

111より

…一度うまくいったからといってなんの考えもなく同じ手を使うのはばかげてた。逆手の下突き攻撃も相手によりけりだ。こうもり男の毒唾がふりかかり、ぼくは吸血こうもりのえじきに…

⇩

ゲーム・オーバー

179

7より

…ハイラルをおおっていた闇の力は退きました。ジハドのたくらみはついえたのです。あの若者はみずからの影とそれをあやつるジハドをついに滅ぼしました。しかしなんと痛ましい勝利でございましょうか。それは自分自身を滅ぼすことによりなされたもの、剣でわが身を貫きとおし…。姫の眠りの解けぬのも、かえってお幸せかもしれません。

⇩

『ハイラル伝承・インパの語り』

⇩

Ｄａｒｋ・Ｅｎｄ

180

138より

…ハイラルをおおっていた闇の力は退きました。ジハドのたくらみはついえたのです。あの若者はみずからの影とそれをあやつるジハドをついに滅ぼしました。しかしなんと痛ましい勝利でございましょうか。それは自分自身を滅ぼすことによりなされたもの、剣でわが身を貫きとおし…姫の眠りの解けぬのも、かえってお幸せかもしれません。

⇩

『ハイラル伝承・インパの語り』

⇩

Dark・End

181

50より

ぼくは剣をふりまわした。しかし…うう、なんてやつらだ、腕がちぎれ、胴体を断ち割られ、首さえなくしても向かってくる、あとからあとから…先を争うようにゾンビたちが群がり寄る…そしてついにぼくは力尽きた…

⇩

ゲーム・オーバー

182

114より

ずざざざーっ、と青黒いやつが砂のなかから姿をあらわした。ぼくは素早く、しかも思いきり剣をふりおろした！　が、致命的な一撃にはおよばなかった。ずんぐりしたその

からだはかたい甲らにおおわれていたのだ。しかしやつはたじろいだ。砂に膝までうずもれながら、ぼくは3度めの攻撃でとどめをさした。

「あっ、まずい！」

うかつだった、やつら数匹の群れをつくるんだった…残りのやつらが姿をあらわしていた。立ち向かうにはもうチャンスを失った。やむを得ない、逃げよう！

ぼくはリーバーを1匹だけ倒して砂漠を逃れた。

⇩ 79へ

183

170より

●砂中をうごめくゲルドアームを発見！ ただちに走り寄ってめった突きにする ⇩ 84へ

●砂中をうごめくゲルドアームを発見！ あらわれた瞬間あたまを貫く ⇩ 92へ

184

104より

光が！　光が部屋中に渦巻いた。ゼルダ姫の体が硬直し、すべてが光のなかで止まって見えた。長い、長い時間がたったような気がする…やがてゼルダ姫から黒い影があらわれた。影はひととき光にあらがうように黒いオーラを波打たせた。けれども光は押し返す。顔も姿もぼくはそのままのやつは、最後にぼくにむかって腕を突き出した。みもだえしながら縮んでいく…あとにあの黒い三角形が残った。

184■「ヤミヨリウマレシモノハヤミニカエレ」呪文をとなえた瞬間、ゼルダ姫のからだが硬直した。そして光が渦巻き黒い影が…。

光は消えた。
ぼくはゆっくりとふりむいた。ジハド、力を失った闇の使徒が後ずさりをする。そのあきらめきれない視線が硬直したままのゼルダ姫にむけられたとき、ぼくの手から杖が飛んだ。
それは鈍い音をたて、ジハドの背に突き刺さった。
ぼくは崩れ落ちる姫をうけとめた。塔の外でダヌークたちのときの声がした。

⇩
エピローグへ

エピローグ

光が影を食(は)んだといいます。闇より生まれしものは闇へとかえり、そしてあとに光が溢(あふ)れたと…。

闇の力をあやつるものは果てました。その瞬間、うち伏したゼルダ姫の頬に赤味がよみがえり、さくら色の唇から小さな吐息がもれました。魔の眠りがとけたのでございます。輝く光のなかで姫はまぶしげに目を開き、そして若者を見つめ、微笑みました。

若者もまたまぶしげな微笑みをかえしました。そしてそっと胸もとに手をやりました。戦いをともにしたゼルダ姫のペンダント。若者はそれをはずし、みずからの手でゼルダ姫の胸にもどしてさしあげたのでございます。そのようすのなんと誇らしさに溢(あふ)れていたことでしょう…。

姫の胸にたたえられた赤いルビーの輝きは、ひときわ深く、あたたかみを増したように見えました。

ハイラルをおおっていた悪(あ)しき災(わざわ)いの事々は破れました。人々は若者の知恵と力と勇気を讃(たた)えました。

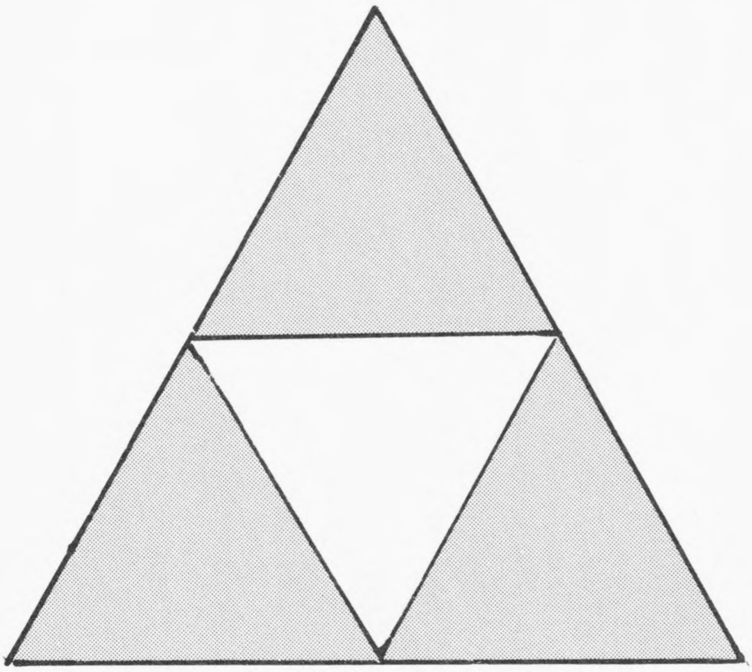
そしてもうひとつの伝説が生まれたのです。

このハイラルには古より伝えられし２つのトライフォースがございます。それぞれ知恵

と力をあらわすものとされております。いまここに3つめのトライフォースが加わりました。そう、邪なるものを生みだしたあの黒い闇のトライフォース…若者が邪をふたたびそこに封じ込めたとき、それは新たな力のあかしとなりました。

知恵と力のトライフォースにならい、それは勇気のトライフォースと呼ばれております。

『ハイラル伝承・インパの語り』



FIN

解説

スピルバーグやルーカスの映画よりもときめきに満ちていて、コンピュータ・ゲームよりも刺激的で、ＲＰＧよりもドラマチック！　そんなゲームブックをめざして、当シリーズはスタートしました。

この、スーパースターフォース「ゴーデスの復活」に続く第２弾、リンクの冒険「暗黒トライフォース伝承」は、ポイントのやりとりやサイコロによる偶然性にたよった展開を排し、純粋に自分でドラマを切りひらいていく楽しさを追求したものです。ページをめくるごとにきみを待ち受ける数々の冒険、堪能いただけたでしょうか。

さて、今後このシリーズをより発展させていくために、この本を読んだ感想を聞かせてもらいたいのです。さらに、これからきみがゲームブックで読んでみたいファミコン・ソフトのタイトルも合わせて記してください。ハガキ、封書、どちらでもかまいません。素直な意見を、左記住所までお送りください。抽選で記念品をさしあげます。

それでは、次回作、迷宮組曲「新ミロンの冒険」でお会いしましょう。

ファミコンゲームブック編集部

あて先　〒102　東京都千代田区麹町５―５―５　ＪＩＣＣ出版局「フライデースペシャル」ゲームブック係

ファミコンゲームブックシリーズ
続々刊行決定!!

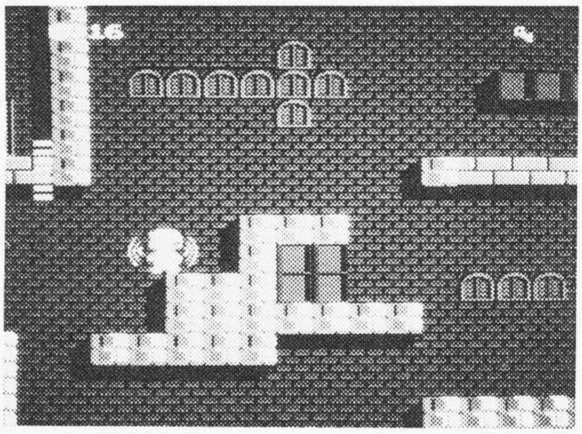
迷宮組曲

5月上旬発売予定　定価350円

　おなじみミロンの大冒険がゲームブックになった。かつてなかったファンタジック・アドベンチャーは、年齢を問わず読む人を魅了します。

　しあわせの森を出発したミロンを待ち受けているのは、魔人マハリトの巣喰うガーランド城。ミラクルアイテムのラッパを片手に、王女エルシラを求めて進撃開始！　ゲームブック史上最大の迷宮を突破し、城内にうずまく謎を解け。どこかに隠された、聖剣エクスカリバーを探し出し、そしてマハリトとの対決だ。

　みごとエンディングまでたどりつけたきみには、アッとおどろく意外なドンデン返しが……!?　これ1冊で、5月のお楽しみはバッチリおまかせ。



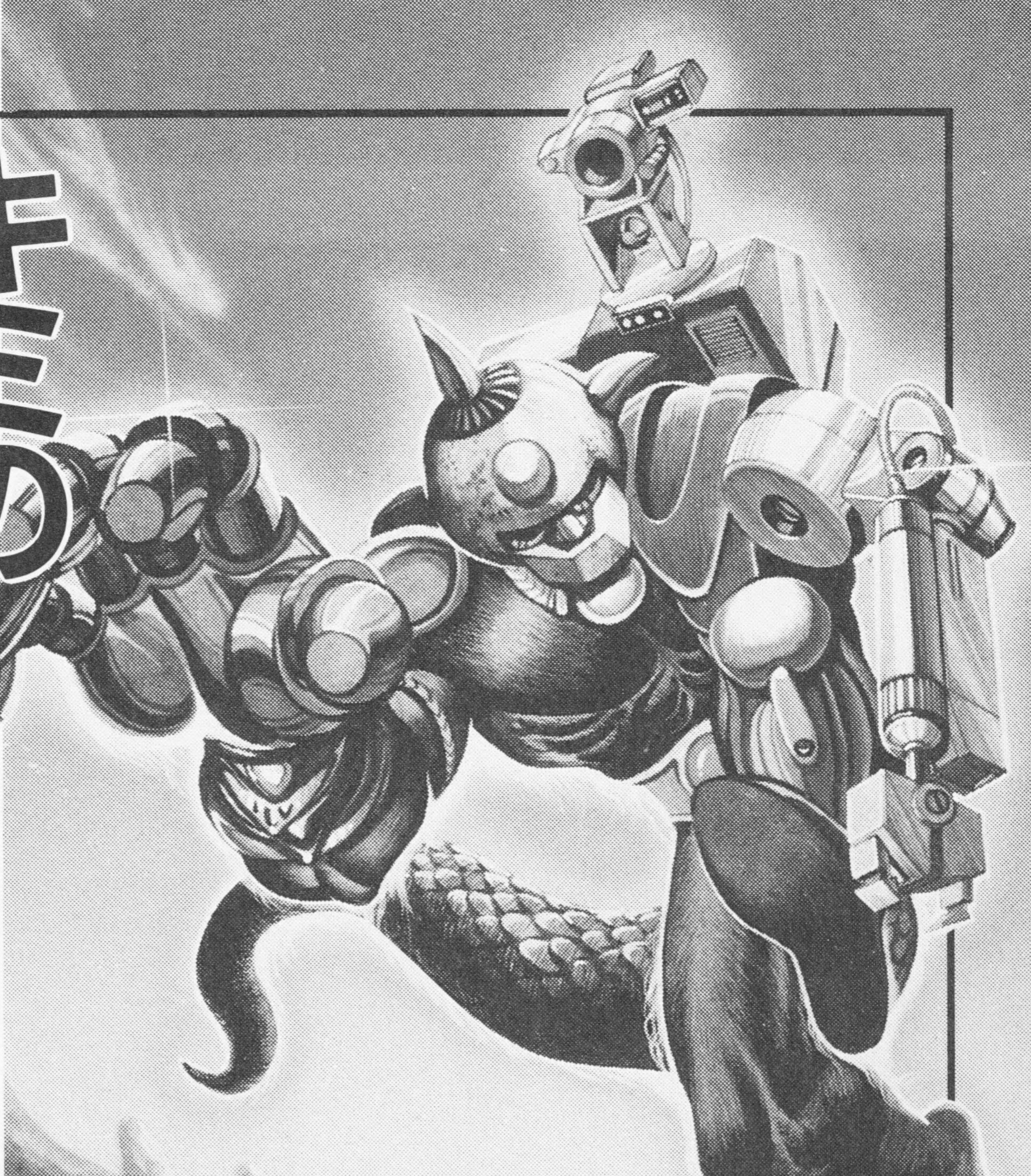
FRIDAY SPECIAL 38 ゲームブック・リンクの冒険
暗黒トライフォース伝承

編集人　ファミコン必勝本編集部　松下光志
スタッフ　レッカ社　井上尚美　ベンチャープロジェクト（鈴木賢司
小幡毅）
ハーブスタジオ
イラスト　カバー/出渕裕　本文/山口まさよし
発　　行　1987年5月10日　第1刷
発行人　蓮見清一
発行所　JICC出版局
郵便番号102　東京都千代田区麹町5-5-5
振替＝東京7-170829 ㈱ジック
電話＝営業部・03(234)4621
　　　編集部・03(239)0237
定　　価　350円
印刷所　大日本印刷株式会社

©1987　JICC出版局　Printed in Japan
乱丁・落丁本はご面倒ですが小社メール室までご送付下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。
©1987 NINTENDO

ISBN4-88063-278-3

キミの勝利を約束する。



大容量・大迫力で人気急上昇！MSX・MSX2 メガROMゲームの必勝本。人気ソフトを豊富な画面写真と詳しいマップで徹底解説！MSXファンなら絶対欲しい一冊。

MSX MSX2 メガROM ゲーム必勝本①

パラダイム著　A5判／980円　好評発売中

収録ソフト

ロマンシア●悪魔城ドラキュラ●レリクス●キングコング2●ハイドライドII●三国志●スーパーランボースペシャル●夢大陸アドベンチャー●ダーウィン4078●は〜りぃふぉっくす●軽井沢誘拐案内●アイドロン●ザナック

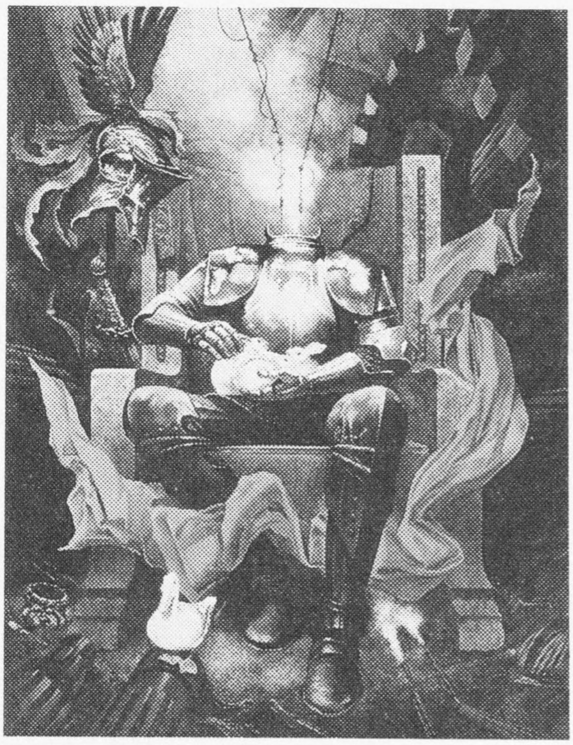
JICC出版局

ADVENTURE NOVELS

アドベンチャーノベルス

最新刊　新書判／定価680円

ゲームで挑戦!! 新しい冒険の世界。

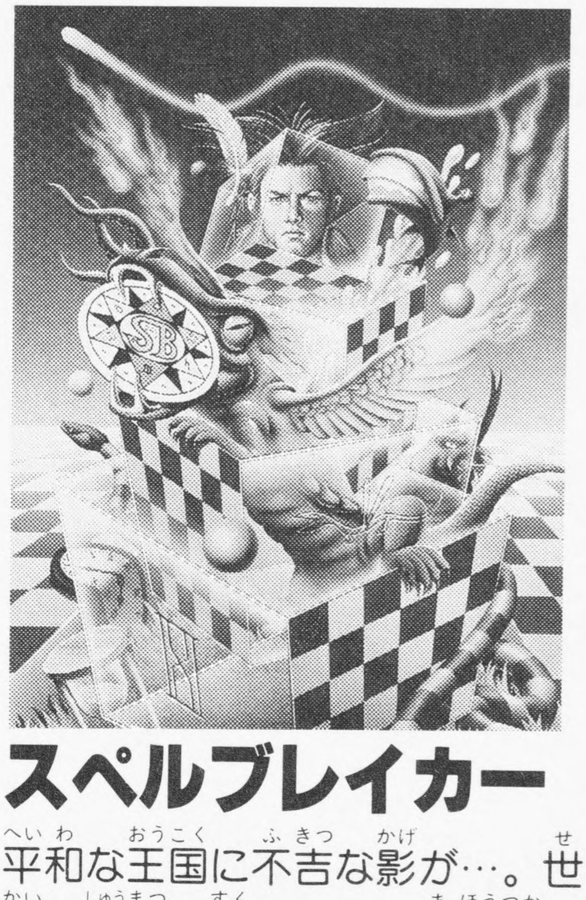


ゾークⅢ

奥深い聖域空洞の中で、少年グレイの見たものは…。今、ゾーク世界の正体が明らかになる―。

サスペクト

殺人の疑いをかけられたトム。タイムリミットは1時間。真犯人を捜し出すことができるか!?



スペルブレイカー

平和な王国に不吉な影が…。世界の終末を救うため、魔法使いカールは"開かずの扉"を開いた!

既刊19冊好評発売中

ウルティマⅠ～Ⅳ
アステカ
ザ・スクリーマー
帝王の涙
夢幻の心臓Ⅱ
ウィル
カーマイン
ゾークⅠ・Ⅱ
エンチャンター
ソーサラー
ウィットネス
13人目の名探偵
妖法記
エイリアン2
ゴーストハンターズ

定価500～780円

JICC出版局

ファミコン必勝本

驚くなっ！
大サービス!!

爆弾発表！

2大別冊ふろく&
全員読者プレゼント!!

4月17日(金)発売より毎号

当る

2大ふろく

4/17 発売号

1 さんまの名探偵
必勝ハンドブック
B5判12P!!

2 アルゴスの戦士
必勝マップ本
B5判12P!!

新企画 **ロールプレイング**
読者プレゼントがはじまるぜ

ゴールドと経験値を集めて
豪華プレゼントを勝ちとるのだ!!

毎号ついてくるGとクイズに答えて経験値をかせぐ。
モンスターのHPを越えれば豪華商品がキミのもの！

大好評 **ごいんきょにおねだり**

ごいんきょシール3枚集めて、好きなソフトが5本!! 大好評のおねだりフレゼントもまだまだ続く!! アンケート・プレゼントもあるぜっ!!

ファミコン必勝本は毎月第1・第3金曜日発売!!

というわけで、ますますお買い得になった必勝本をどーぞよろしく！

FAMICOM GAME BOOK

ファミコンゲームブック

リンクの冒険

暗黒トライフォース伝承

著者／井上尚美
制作／レッカ社
ゲーム作成／ベンチャープロジェクト

ファミコンゲームブック
リンクの冒険
暗黒トライフォース伝承
フライデースペシャル
38

ファミコン必勝本

FRIDAY SPECIAL

ファミコン必勝本 FRIDAY SPECIAL

ファミコンゲームブック

人気ソフトをもとにした全く新しい物語が展開するゲームブック！FCを持っていない人ももうソフトをクリアした人もいつでもどこでも冒険が楽しめるんだ!!

ファミコンゲームブック 第1弾

ゲームブック スーパースターフォース
ゴーデスの復活

よみがえったゴーデスの企みとは？マヤ神殿からアトランティス大陸、スフィンクスの謎を解き、恐竜たちの棲む古生代の闘い。7つの時の秘石をもとめ、ファイナルスターは時空をこえる。新感覚のゲームゾーンへ、時空体験が今、始まる!!

ファミコンゲームブック 第3弾

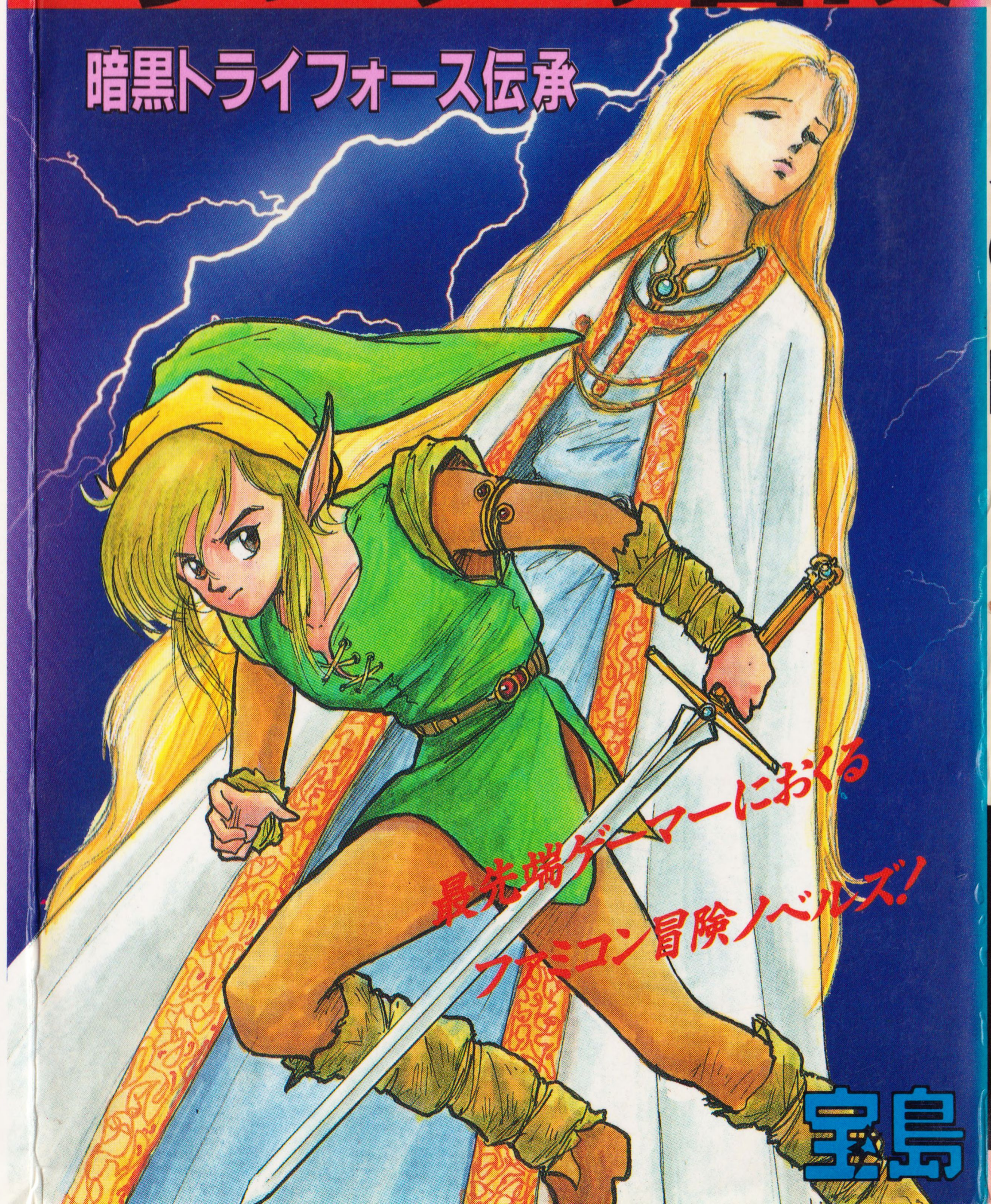
ゲームブック 迷宮組曲 (近日発売)

おなじみミロンの迷宮大冒険！広いガーランド城がスリリングな迷宮になってたちふさがった!!

ファミコン必勝本 FRIDAY SPECIAL ゲームブック2

リンクの冒険

暗黒トライフォース伝承



最先端ゲーマーにおくる ファミコン冒険ノベルズ！

宝島

リンクの冒険

暗黒トライフォース伝承

FS フライデースペシャル 38

ファミコン必勝本 FRIDAY SPECIAL

リンクを待ちうける第3の冒険
復活したガノンの謎!?
そして眠れるゼルダ姫の秘密とは
暗黒のトライフォース
そのおそるべき理力が最強にして
最大の敵を生み出した!!
ハイラルをめぐる一大スペクタクル……はたしてきみは、この王国に再び平和をもたらせるか？

本書はソフトをもとにした
オリジナルストーリーです

©1987 Nintendo

定価 350円

JICC出版局 ISBN4-88063-278-3 C2076 ¥350E

ファミリーコンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です

毎週金曜日のお楽しみ！フライデースペシャル！

1 バグボーイスペシャル
2 バレーボール
3 ソロモンの鍵
4 じゃじゃ丸の大冒険
5 スーパーピットフォール
6 スーパーゼビウス
7 テラクレスタVS A.S.O.
8 戦場の狼
9 子猫物語
10 ファミコン・必笑・コミック
11 バギーポッパー
12 マリオ探偵の事件簿
13 ミシシッピー殺人事件
14 プロレス
15 スーパースターフォース
16 必勝テク道場
17 アイギーナの予言
18 ザナック
19 ディーヴァ
20 きね子
21 闘いの挽歌
22 メトロクロス
23 デッドゾーン
24 水晶の龍
25 魔鐘
26 シャーロック・ホームズ
27 必勝テク道場2
28 パルテナの鏡
29 ディープダンジョン
30 リンクの冒険
31 飛龍の拳
32 スーパースターフォース・ゲームブック
33 メルヘンヴェール
34 オトッキー&いきなりミュージシャン
35 ゴルフジャパンコース
36 とびだせ大作戦
37 南国指令スパイVSスパイ
38 リンクの冒険・ゲームブック

ファミコン必勝本 FRIDAY SPECIAL